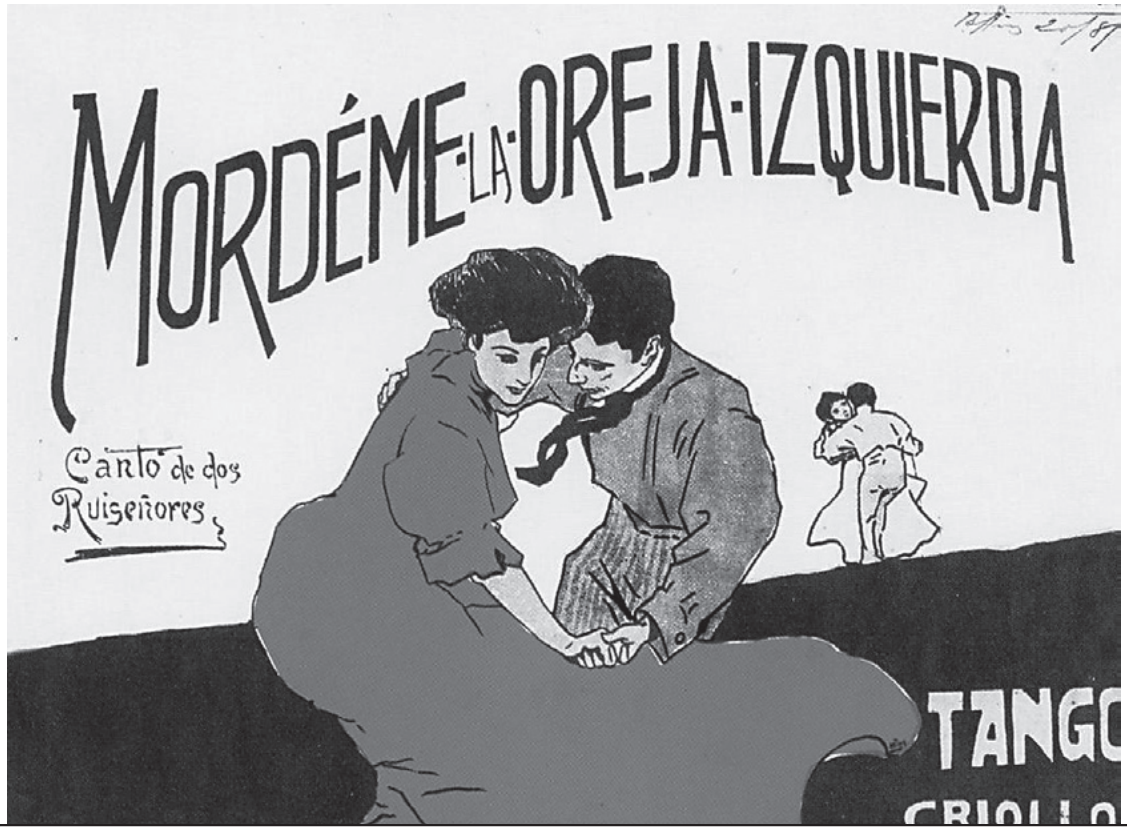
Tangolandia

春
2012

日本タンゴ・アカデミー会報



－目　次－

さらに深めたい会員の絆…… 島﨑長次郎 … 2
わたしのひそかに愛するタンゴ　Las vueltas de la vida …… 高場将美 … 3
忘れ得ぬタンゴの人々（最終回　目賀田綱美さん）…… 米山　宏・瑛子 … 7
想い出のタンゴ喫茶巡り　第5回　純喫茶「クンパルシータ」 …… 山田建雄 …10
私の愛聴盤（新企画・第１回）…… 松本外司 …12
アポロヒーア・タンゲーラの系譜…… 齋藤冨士郎 …15
ガルデルからの最後の手紙…… 弓田綾子 …17
蛇腹三題噺…… 山本雅生 …19
タンゴと浮世絵…… 勝原良太 …22
Tango bar めぐり　雑司が谷「エル・チョクロ」…… 町田静子 …24
南米３ヵ国タンゴダンスツアー PART2 …… 海部英一郎 …26
八代と言えば「タンゴ」と言われるように（最終回）…… 野口義征 …30
ファビオ・ハーゲル・セステートを聴く（2/23）…… 佐藤光男 …34
アルゼンチン・ディ　レポート（2/25）…… 山根　洋 …36
全国会員の集いに参加して（3/4）…… 岩垂　司 …38
蟹江丈夫さんお別れ会（3/25）…… 大澤　寛 …39
「リンコン・デ・タンゴ」レポート …… 福川靖彦 …40
訳詞コーナー Cucusita …… 大澤　寛 …47

さらに深めたい会員の絆

会長　島﨑　長次郎

３月４日の「全国会員の集い」を終えて東北大災害1周年を迎えました。あの日を記念する様々なメディアの報道が流れる中で、被災された方々の“１年も経ったのだから普通の暮らしがしたい”という声に強く心を打たれました。「複合災害」や「人災」という言葉が使われる現在、我々のなすべきことや被災地の方々に対する思いは既に幾つかの場所で会員の皆さまに申し上げて来ました。繰り返しを避けて、被災地の方々への共感を薄れさせないことと、我々もまた不測の災害に対する備えを怠らないようにとだけ申し上げて別の話題に移ります。

日本タンゴ・アカデミーでは、昨年は皆さまからのご意見を反映した新しい試みとしてミロンガを開催しました。初めてのことでもあり、具体的な運営面では幾つかの問題点も浮上しましたが、幸いに会員以外の方々の参加もあって実に168名が集うという充実したひと時となりました。そして何と言ってもタンゴに欠かせないもののひとつがダンスであることに改めて思い至りました。さらに「全国会員の集い」ではオルケスタ・デ・タンゴ・ワセダの生演奏をただ聴くだけでなくて、多くの会員の皆さまが立ち上がって思い思いにダンスを楽しまれたのは、今までにないことで極めて印象的でした。

今年度も、これまでの演奏家論やレコード論などの静的なものに、ダンスや生演奏などの動的なものを加え、さらに正副二つの機関誌を通じての全国の会員の絆を一層深いものにしたいと希っております。ひき続き皆さまの建設的なご意見を是非お聞かせ下さい。

NTA ウエブ・サイトへのアクセスについて

2011年春号第45頁に山本幸洋さんの詳しい解説がありますが、まだ時々問い合わせがありますので手順を再確認します。

①「インターネット・エクスプローラー」を起動する

②http://tangoacademy.jp/ を記入する

③現れるトップページの上欄の「ログイン」「パスワードの再発行」の前者をクリック

（３－１）ユーザー名に　NTA○○○　この○○○には会員番号の３桁の数字を

（３－２）パスワードに　chetango を

記入すれば閲覧可能になります。

わたしのひそかに愛するタンゴ

人生の変転　Las vueltas de la vida

高場　将美

わたしがギター伴奏している歌手の峰万里恵さんが、「アダ・ファルコーンの録音した曲で、ぜひうたってみたいタンゴがある。題名は覚えていない。すごく、むずかしそうな曲なんだけど」と言いだした。アダさんの録音はかなりたくさんあるけれど、わたしは「もしかして(そんなはずはないが)わたしの好きなあの曲かな？」と思って、「変な曲だった？」と聞いた。「そう、かなり変なタンゴ」

しめた！　変な曲ならアレに決まっている。わたしは好きで、いつも頭の中で鳴っていたけれど、ほかのだれも好きではないらしく、埋もれていたあの曲が、いまよみがえって(大げさですね！)うたわれたら、こんなうれしいことはない。音痴のわたしがうたっても、人にはわからないので、わたしはＣＤから採って「この曲ですか？」と万里恵さんに聞いてもらった。「そうそう、その曲！」

“**Las vueltas de la vida**”というタンゴである。

この曲は、わたしは今から50年ほど前に初めて耳にして以来、片時も忘れたことはない。最初に聴いた（というか、わたしの知っている唯一の）レコードは、フランシスコ・カナーロ楽団で、アルベルト・アレーナスがうたっているものだった。日本で発売されたカナーロ楽団のＬＰにひそかに（？）まぎれこんでいて、日本語題は『人生の変転』。あんまり冴えない題だと思ったが（失礼）、仕方がないですね。わたしは今なら「人生の回転」と、スペイン語を直訳するが、冴えない点では大差ない。

最初に耳にしたときから「なんだ、これは！」と、わたしはこの曲のとりこになった。「変な曲だ」ということは、最初から感じていたが、どこが変なのか分析したことはなく――分析する気もなく――、とにかく共感し、この曲のファンになった。

わたしはレコードは持っていなかったので、偶然どこかで流れてくれれば幸運……聴いた回数は非常に少ない。でも、要所は（ごく断片だが）歌詞もメロディも覚えて、頭の中でうたっていた。それ以外の部分、曲の全体は覚えていなかった。覚えていたと思った歌詞が、大事なところで１語ちがっていたのは、最近の研究（笑い）で知った。若いとき覚えた間違いは、ずっとそのままなんですね。

この曲を、アダ・ファルコーンが録音していたことは数年前に知った（たぶん初のＣＤ化はヨーロッパで、1991年とのこと）。

そして、それ以前にチャルロも録音していたことは、ごく最近になって知った（アルゼ

ンチンで、ＣＤ復刻2011年)。

『人生の変転』が入っているＣＤ
●チャルロ（1928年録音）
RGS 1856-2 TANGO COLLECTION
●アダ・ファルコーン（1931年録音）
el bandoneon EBCD-29
（ともに伴奏カナーロ楽団）

この曲の作曲者は、**フランシスコ・カナーロ Francisco Canaro（1888 - 1964）**と著作権登録されている。わたしはかつては、歌曲の作曲についてカナーロの悪口をいろいろ聞いていたので、この曲は別人がつくったのを、カナーロが買って自作として登録したのだろうと考えていた。

いまは、いろいろ勉強したので（自分勝手にではなく、人の伴奏のためにギターを弾くようになったので)、だいぶわかってきた――と、自分では思っている。

愛する曲について、なんにも考えたことはなかったが、このたび伴奏するために、聴き取って楽譜をつくったりして、ようやくわかったので、ここに記す次第である。

結論から言うと、この曲の最初のテーマ（メロディ）はカナーロ作曲である。

このテーマが、変なのだ。

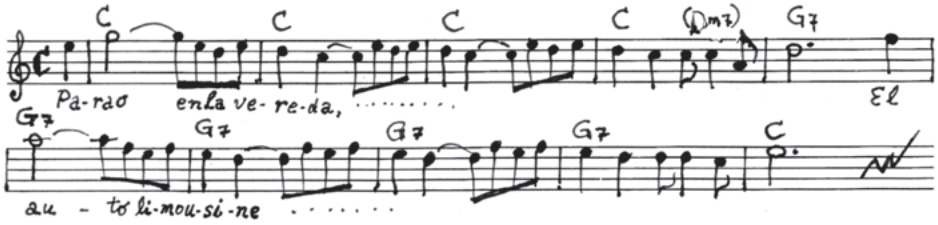
タンゴに限らず、ふつうポピュラー・ソングは、楽譜にして４小節の長さが、ふつうのメロディの１区切りで、それが自然に聞こえる。でも、この曲は５小節なのだ。最初から変則の長さのメロディをぶつけてくる！

しかも、そのメロディは、「うたう」というには硬すぎる短いパターンを、これでもか！と反復するもので、この強引さは、カナーロならではのものだ。すごく「ぶっきらぼう」な５小節のメロディ２本で、この曲ははじまる。この計10小節は、完全にカナーロの創作と断言できる。(次ページに添付した楽譜の部分です)

これだけでは曲にならないので、同じパターンを展開して、和音の変化を加えて、あと２本のメロディ（10小節）が付いて、第１部になる。展開の部分は、カナーロの音楽性を超えているので、他の人が作曲したにちがいない。

誰が？……証拠はないけれど（根拠はあるが、説明していると長すぎて、一般的に興味なさそうなので省略する)、カナーロ楽団の実質的な音楽監督だった、ピアニストの**ルイス・リッカールディ Luis Riccardi（1895 - 1983）**だったはずだ。リッカールディは、1919年にカナーロ楽団に参加し、カナーロとは音楽の嗜好がちがうので（リッカールディのほうが「洗練」されていた）最初は苦労したようだが、誠実に仕事をし、カナーロの信頼が厚かった。長いあいだ、すべての編曲をし、カナーロが外国旅行で不在の時は「カナーロ楽団」を指揮し、実務面でも「秘書」の役をつとめた。もちろん、作曲補佐・編曲・指揮すべての面で、カナーロの意向をすべて生かしていた。

『人生の変転』は1928年に劇場レビューで、女優・歌手**ソフィーア・ボサーン Sofía**



Bozán（1904 - 58）がうたうために作られたのだそうだ。

そのショーの台本作家で、演出も兼ねていたマヌエール・ロメーロが、有名人カナーロに、１曲助けてくださいとお願いしたのだろう。そこで、カナーロがひねり出した（そして、リッカールディが体裁をととのえた）、へんてこな、でもインパクトのある、ブツブツ切れるメロディに、ロメーロは、みごとにその特徴を生かした歌詞をつけた。

Parao
en la vereda
bajo la lluvia
que me empapaba
la vi pasar.

El auto limousine, / como un estuche, / de mí la aislaba / con su cristal. Frenó, / me dio dos mangos / y en la mirada / de indiferencia / que echó al seguir, noté / que para ella / yo era un mendigo / sin importancia / y me reí.

（歩道に立ちすくんで、雨の下で、ずぶ濡れになって、わたしは彼女が通り過ぎるのを見た。リムジン自動車が、まるでなにかのケースみたいに、わたしから彼女をへだてていた、ガラスでさえぎって。

彼女はブレーキをかけ、わたしに２ペソくれた。そして走り去るとき、わたしに投げた冷たいまなざしに、わたしは感じ取った――彼女にとっては、わたしは、なんでもないただの乞食なのだと。そしてわたしは自分を笑った）

第２部は、人生の回転の残酷さを呪い、かつてわたしは金持ちで、彼女に宝石や自動車（複数ですよ！）を買って与えていたが、ギャンブルで身をもちくずし……と、物語られる。

この部分は、ふつうの定型詩で、少し工夫はあるが、わりあい平凡だ。この第２部は、歌詞が先に書かれて、あとからメロディが付けられたのに違いない。そのメロディに、カナーロはたぶん、まったくタッチしていないだろう。リッカールディが、とても上手に、地味だけれど変化のある、つなぎのメロディをつくっている。この、劇場のステージにふさわしいメロディの語りかたは、さすがプロ！

そのあと、第１部のメロディが別の歌詞でうたわれ、曲は終わる。タンゴ歌曲の通例では、さらに第２部を同じ歌詞で繰り返すのだが、この曲の場合、そうすると、しまりのないドラマになってしまう。ふつうのパターンにはめると死んでしまうのも、この曲が「変」であり、むずかしいと感じられる理由なのだ。最後の歌詞は――

¡Mujer, / pa ser falluta! / dije, amargado, / y los billetes / despedacé.

Después, / silbando un tango, / galgueando de hambre / pa mi cotorro / me encaminé.

（女め、心のねじけたもの！　わたしは、にがく言い捨て、２枚の札をビリビリに破いた。その後、タンゴをひとつ口笛で吹きながら、空腹で息を切らしながら、わたしの貧しい小部屋へ、足を向けた）

品があるとは、とても言えないが、みごとなお芝居の１場面！　この俗っぽさが（ちゃんと意味をわかっていなかったが）初めて聴いたときのわたしをとりこにしてしまったのだろう、と今になって思う。今でも大好きである。

作詞者の**マヌエール・ロメーロ Manuel Romero（1891 - 1954）**は、数々の有名タンゴ、ヒット曲をつくったが、レビュー劇場の台本作家・芸術監督、後には映画監督として大成功した人である。ただし晩年は、時代の流れと、いいかげんな人柄がわざわいして不遇で、亡くなったときは極貧状態だった（カナーロが、そう書いている）。

この曲は、すぐにフランシスコ・カナーロ楽団が伴奏して、**チャルロ Charlo（1922 -99）**がうたってレコード録音された。３年後には、**アダ・ファルコーン Ada Falcón（1905 - 2002）**が、やはりカナーロ楽団の伴奏で録音した。どちらも、すばらしい！　でも、変で、むずかしい曲……また、歌詞なしの演奏では魅力がなくなってしまうせいだろう、他ではとりあげられなかったようだ。

1940年に、マヌエール・ロメーロが『昔のカーニバル **Carnaval de antaño** 』という映画を脚本・監督した。彼の映画は、ドラマよりタンゴが中心で（タンゴもドラマですよね）、チャルロと、ふたりの女性歌手――ソフィーア・ボサーンと、チャルロの奥さんだった**サビーナ・オルモス Sabina Olmos（1913 - 99）**――が出演した。

チャルロは、この映画で『人生の変転』をうたった。そして、ギター・グループの伴奏で、この曲を再度録音している。このギターも、歌もすばらしい。ただし、レビューと映画ではお客がちがうことを考慮したのだろう、ロメーロは歌詞の乱暴すぎる表現を書き直して、やや品のいいものにしている。「さすがプロ！」といえる出来ばえだけれど、わたしは最初の生き生きとした歌詞のほうが好きだ。チャルロの歌は、どちらの歌詞でも完璧といえる。

その後も、この曲は敬遠された。カナーロ楽団・アレーナス歌のほかは、「むずかしい」曲ならこの人！、**エドムンド・リベーロ Edmundo Rivero（1911 - 86）**がうたったくらいだ。男性が女性に捨てられっぱなしという題材が悪いんでしょうか？

＊無料のインターネットで、チャルロがうたう（1940年録音）この曲を、http://youtu.be/EvCB4UVX2Gc で聴くことができます（静止写真です）。また、映画『むかしのカーニバル』の歌のシーンを集めたものが、http://vimeo.com/9923887 です。こちらは画質も音質もよくないですが、わたしはじゅうぶん――本来の画面や声を想像しながら――たのしみました。３人の歌手で、半分くらいが有名曲です。

忘れ得ぬタンゴの人びと……〔最終回〕

目賀田 綱美さん

★ 米山　宏
☆ 聞き手 米山 瑛子

☆　このシリーズも大詰めになりますが、今回は日本にタンゴの種を蒔かれた超大物の目賀田先生です。かつて私たちも門下生として親しくご指導を頂いたので、ことのほか思いいれも深く、改めてとなると何からお話すべきなのか迷ってしまいますねぇ…。

★　まさにそうです。ぼくがはじめて先生にお目にかかったのは、たしか昭和26年頃のことで、高橋忠雄さんの紹介でした。それからダンスのご指導を頂くとともに、大正末期にパリ滞在中に現地で聴いたタンゴ楽団、マヌエル・ピサロやビアンコ＝バチーチャなどのお話を楽しく聞かせてもらい、その都度胸を躍らせたことを思い出します。こゝには加年松城至さんや、蟹江丈夫さんも一緒でした。

☆　目賀田男爵と、俗にいわれるように、先生は名門の出ですね。

★　目賀田家というのは元々戦国時代の城主でもあったのですが、その後紀州徳川家に仕えた有力な旗本の一族で、綱美さんは明治の元勲伊藤博文内閣の閣外の実力者目賀田種太郎の長男として生まれたのですが、母がまた著名な勝海舟の三女逸子という文字通りの名家に生まれ、時代を先取りするようにして第１次世界大戦の終わった後の1920年から1926年までパリに遊学し、当時人気上昇中のタンゴ・ダンスにのめりこんで、社交界のスター的な存在になった、といわれています。

☆　お父様の種太郎さんは大変な方で、財政通としても知られ、韓国における経済の発展と財政の確立に功労があって男爵を賜ったとされ、また学問の道にもよく尽くされ、今日の東京芸大や専修大学の創立者の一人としても顕彰されているようですね。74才でお亡くなりになったのが大正15年９月10日だそうですが…。

★　そう。それで綱美さんは急遽帰国することになり、５年間の外遊は終わるわけですが、パリで身に着けた生活は超一流で、飛行機はフェアチャイルド、車はシトロエン、オートバイはハーレーダビットソンという豪華さで当時の人々の話題になったといいますね。そして何より嬉しいのは、パリで魅せられたタンゴを、わが国にレコードの紹介と踊りの両部面で多くの人々に知らしめ、その普及に計り知れない力を尽くされたことです。

私がことに興味深く聞いたのが、パリ滞在中に体験した踊り場や出演していた楽団のことで、モンマルトルにあった南米人の経営するキャバレー「エル・ガロン」でのマヌエル・ピサロ楽団（先生はマヌエル・ピッツァロと発音されていた）や、ビアンコ＝バチーチャ

楽団などでしたが、ピサロにべた惚れで、３人のバンドネオンを中心にしたアルゼンチン人だけの楽団はこれが唯一だったといってました。

☆　当時はアルゼンチンからパリに来る人も多かったのですね。平和ムードもあって。

★　そうでした。それと今も似たようなところがあって、パリに行くと一種の箔がつくということもあって、タンゴ界はパリ行きが熱病のように流行っていたのですね。こうしてタンゴは急激な上昇気流にのって世界に広まり、未曾有なタンゴ全盛期を謳歌したのが1920年代からの1940年にかけてのおよそ20年間ということになるわけで、まさにアルゼンチンもヨーロッパもともにタンゴにとって「黄金期」で、懐かしくも心躍る“古き佳き時代”だったのですね。

先生は踊りをメインにタンゴの普及に力を尽くされたのですが、踊りのためには音源（レコード）が何より大事なのに、当時は本場のものが殆どない情況だったのを嘆かれ、銀座の「十字屋」やデパートなど通じて輸入の手立てをされたり、あるいは創業開始直後のビクターを説得してアルゼンチンの原盤を手当てさせてリリースさせるなど、何かと最初期の時代にお骨折りいただいたと伺っています。日本における初期のタンゴを語る場合、とにかく絶対に忘れてはならない方、といえばまず目賀田綱美さんと断言できます。

☆　本当にそう思います。先生は文京区の白山に住んでおられ、私も鎌倉から東京芸大に通学する傍ら、ダンスの勉強をするために白山に通わせてもらったのですが、レッスンは厳しくても、とても包容力のある人間味豊かな紳士でした。お教えいただいたことも沢山あって、それらを今折々に懐かしく思い出しています。

★　ご自宅にあったオーディオも見事でした。アンプはマッキントッシュで、スピーカーはジムランシング、そしてカートリッジはピカリングといった具合で、当時としては目を見張るセットを揃え、それにピカピカの外盤を乗せて醸し出すタンゴは、実に優雅で、陶酔させられましたね。こういうタンゴの楽しみ方もあるのか、とあらためて教えられたものですが、そのほかにも学ぶことが多々ありました。踊りに備えて（体臭にでるから）“醤油は控えよ”とか“納豆も食べないように”とか…。いろいろと。

☆　私は若かったせいもあってか、とても可愛がって頂いて、あちこちへよく連れて行って下さいました。先生は体力をつけるためにとおっしゃってステーキは欠かせませんでしたね。それにスコッチウイスキーが大好物で、飲むほどにパリ滞在当時の思い出など、ともかく談論風発で食事は本当に楽しかったのを思い出します。お好きな食材店は、青山の紀伊国屋（ステーキ）、レストランでは有楽町のレバンテ（カキ）、帝国ホテルなどなど…。

★　私も先生に連れられて何度かご一緒したことがあります。鮮明に覚えているのは霞ヶ関ビルの中の華族会館で、普通なら顔を出せないようなハイソサエティーの雰囲気を体験させていただきましたし、ダンスでは当時大変有名な鶴見の花月園に連れて行っていただ

いたのを記憶しています。マナーにはうるさくとも、しかしその半面自由奔放で魅力溢れる人でした。そして特に忘れられないのは昭和36（1961）年、タンゴの大御所フランシスコ・カナロの一行が来日した折、赤坂にあったナイトクラブ「花馬車」に先生の門下生が集って行き、カナロの演奏で踊った一夜は生涯の喜びで、目賀田先生の思い出とともに私たちの“心のお宝”になっていますね。

目賀田さんにインタビュー中の米山宏さん

☆　晩年には自宅の庭の手入れをされた際、重い石を移動させようとして腰をいため、聖路加病院に入院する羽目になってしまい、お見舞いに伺いましたが、腰のためによいとかで、ベッドの上に畳を敷いて寝ておられたのを覚えています。しばらく後に一旦退院されるのですが、その後昭和41年５月に腎盂炎で再入院され、昭和44（1969）年２月25日に脳溢血により惜しくも72才でお亡くなりになられましたね。

★　そのあたりのことは「目賀田ダンス＝目賀田匡夫著、モダン出版社（1999年）に詳しく述べられていますが、それによると“昭和41年の５月、ＴＢＳテレビの「女性専科（資生堂提供)」の番組で、“奥様はグループがお好き／タンゴを踊る”と題して目賀田ダンスが紹介された。女性３人のお弟子と出演して、対談とデモンストレーション・ダンスを披露したが､その帰りの車中で腎盂炎症状を訴え､即聖路加病院で闘病生活に入った“とし､”それが綱美のダンスの最後になったと“と述べ、さらに、ラスト・ダンスのそのお相手をしたのは米山瑛子だった”と付け加えている。

☆　本当に名誉なことだと思っています。あんな偉大な先生の最後のお相手で踊っていただくなんて…。フッと思うことがあります。タンゴ・ダンスのブームともいえる昨今の情況を、もし池上本門寺に眠っておられる先生がご覧になったらどう思われるのでしょうか…、と。きっとその盛況ぶりをにこやかな目で眺め、かつて蒔いたタンゴの種子が大きく実ったことに万感の思いを込めて拍手を送ってくださるのではないかと思います。そういえば後年に先生を称えて「A LO MEGATA」というタンゴが作られましたが、なかなかの佳曲ですね。

★　そう。これは日本のタンゴ事情を詳述した「日本のタンゴ／ EL TANGO EN JAPON」の著者であるアルゼンチンのLUIS ALPOSTAが、目賀田男爵の生涯にことのほか興味をもたれ、かつてのウルグアイの大使をされた大隈公爵の夫人からの話などをもとに詞を書き上げ、歌手のエドムンド・リベロに届けて作曲されたもので、実によくできたタンゴといえます。レコードとしてはそのリベロのもの（1983年POL5275282)、のほか、阿保郁夫（1983年、POL H32P20154）などが、知られています。先生もきっと喜んでおられるに違いありません。

☆　亡くなられて早いものでもう43年になりますが、わが国のタンゴの普及に尽くされた功績は不滅の光りを放って、これからも私たちを暖かく導いてくださることでしょう。

（文責：島﨑）

想い出のタンゴ喫茶巡り（第5回）

純喫茶「クンパルシータ」

山田　建雄（京都）

写真提供：中村 尚文氏

初めに、今はほとんどが無くなったタンゴ専門の喫茶店で盛業中のお店をと考え、神戸の松尾　篤様のご協力をお願いして一度連れて行って頂いたタンゴ喫茶を訪ねて大阪、西田辺までご足労願いましたが休業でした。諦めて京都の想い出だけにしました。

私の中学・高校時代は街を歩いていますと、タンゴ喫茶でなくても音楽喫茶からはタンゴが流れ、“あっ、ディ・サルリだ、プグリエセだ、カナロだ、ホセ・バッソだ、ティピカ東京だ”と楽団名を言い当てられるほど各楽団のスタイルが確立していましたが（同じ曲でもメロディー、アンサンブル、リズムが少しずつ違っていて）今は“どの楽団？”と迷うことが多くなり“僕も齢になったな”と自覚しながら、時折家でレコードやCDを聴いています。

京都には木屋町筋にラテン、タンゴの聴ける店が一軒、そして京のど真ん中、四条河原町二筋上ル東へ入った（四条木屋町西二筋からも入れる）ところに

あの有名な「クンパルシータ」があり、私も時折お邪魔しました。当時は夜はかなり繁盛していてカップルで一杯でした。昼間の比較的暇な時間には店主（ママさん）が創業時のことなど色々お話をしてくださり、嵐子さん（藤澤嵐子）にサイン色紙を頂いたことを大変自慢なさっていました。

昭和35年頃に改装された当時の新聞広告「タンゴ喫茶クンパルシータ新装開店」が今も記憶に残っています。その頃のママさんはチャキチャキのタンゲーラでSP，EP，LPレコードやカセットテープを多く所蔵されていて１枚、１枚を大切にお客に聴かせてくれました。時には私にも“何かお聴き

になりますか？”と優しくリクエストを促して下さったのも想い出のひとつです。そしてコーヒーはお店独自のブレンドで香り、味、色、量からカップにいたるまで、今も忘れられない独特のものでした。

その「クンパルシータ」が閉店されてもう５～６年にもなるでしょうか？　晩年は、注文しても30分位経って忘れたころに出て来るコーヒーと、ママの燻し銀の可愛いお人柄で最後までお店を護りぬかれた精神は、昭和前期を生き抜かれた人の心意気であり、私の心に何かを残してくれた想い出の喫茶店でした。

ママが今もお元気で居られることを願っています。

イラスト提供：神戸　宮本 協和氏

「ノチェーロ・ソイ」を主宰する宮本政樹さんの同人誌「Nochero soy」の発刊を記念するミロンガが２月26日銀座のマイ・ハンブル・ハウスで開催された。司会進行はNTA副会長飯塚久夫さん。同じく会長島﨑長次郎さんの「手を携えてタンゴの世界を拡げよう」との挨拶があった。生演奏はチコス・デ・パンパ。唄はあみさん。ダンスが間々田佳子＆ギジェルモ・ボイドに京都から飛び入りでルシア＆アルバロの２組。創刊号は120ページから成る堂々たるもの。発展が期待される。

私の愛聴盤

～第１回～

松本　外司（金沢）

黒いパイプ　　吉野　章と其の楽団

いきなり日本製のタンゴですが、子供の頃レコード店で聴いた印象がとても強く、其のリズムに乗って明るい歌声が店内に響いたのが、その当時のレコード店の様子と共によく覚えています。後になって、戦後直ぐの「ラジオ歌謡」として、サトウ・ハチロー、服部良一の名コンビで昭和21年発表され、近江俊郎、二葉あき子の歌でその年の９月にレコード発売されたのがわかりました。タンゴの道に入ったきっかけがこの曲なので取り上げましたが、ここでは「吉野　章と其の楽団」が歯切れの良い名演奏を披露します。中程で吉野氏のヴァイオリンの音色と同時にうなり声（？）が入っています。

ランプの灯影　　（唄）　Ｊ・ドゥラン　　ディ・サルリ楽団

Ｅ・Ｔ・Ｐクラブ時代に、会員の中に裕福な方が何人も居られ、いつもタンゴを聴きに来るように云われ、夜遅くまでタンゴを聴かせて頂きました。この曲も、演奏スタイルや、歌詞の大要など話してもらって私なりに空想しながら聴いたものです。とっくに終電も無くなり、「兼六公園」を通りながらタンゴを口ずさんで帰ったものです。名流楽団は歌の

伴奏にも秀でており、この楽団は最たるものでしょう。ディ・サルリとＪ・ドゥランのコンビのものの中でも最もすきな演奏です。

ヌエヴェ・プントス　　カルロス・ディ・サルリ楽団

レガートな演奏で主題が始まり、次いでスタッカートに、とカナロの名曲が流れ後半は、シモン・バジュルの妖艶極まりないヴァイオリンが流れ、聴くものを惹きつけて離しません。Ｅ・Ｔ・Ｐクラブのレコードコンサートで幾度も取り上げましたが、この演奏の良さがわかってもらえず、悔しい思いをしたことがあります。ところが、小松亮太氏の2009年の著書「小松亮太とタンゴへ行こう」の中で“なにもなく、すべてがある”のタイトルでディ・サルリに触れ、「最高級の気品」とも「ショッキングな清涼剤」と絶賛され、“一番好きな演奏を３曲あげろといわれたら”として「ヌエヴェ・プントス」をトップにされました。同感される方が居られて嬉しくなりました。この本のお陰で、またディ・サルリを聴くのが楽しくなりました。

ゆりかごの歌　　（唄）　アナ・マリア

タンゴ・ファンの「クリスマール・レコード」には、特別な思いをもっています。というのも、まだ戦後でタンゴのレコードに飢えていた頃、野崎浩一氏などの熱意で、新たに日本人好みの選曲を、之もまた日本人好みの楽団で演奏させるという画期的な企画が実現し、アルゼンチンから直接原盤を輸入してわずか一ヶ月で日本で発売され、わが国のタンゴ・レコード史に大きな足跡を刻みました。1953年２月22日録音のこのレコードを聴いたのは16才の時で、野崎氏の訳詩を見ながら思わず泣いてしまったのを覚えています。クリスマール・レコードの盤の質には色々ありますが、このレコードはＬＰレコードのように綺麗で雑音もなく素晴らしいものです。

君のほほ笑み　　ホセ・ボール楽団

数十年前、日本ビクターから発売されたＬＰ「1920年代の軌跡」のＡ面に針を落としたところ、トランキロなピアノに導かれて、センチメンタルな美しいメロディが流れ、バンドネオン、ヴァイオリンが代わる代わる可憐なタンゴを演奏し、あっという間にエンディング、この素晴らしい演奏に一度に惹きつけられてしまいました。

また、この曲には不思議な縁があって、エンリケ丹羽氏が担当しているＦＭ　津のタンゴ番組にこの曲をリクエストした数日後、かねて島崎氏から雑誌「ＳＰレコード」の“愛聴盤シリーズ”に記事を載せるよう紹介され、其の中にこの曲も入れようと記事を書いている時、島崎氏からこの曲のＳＰ盤が手に入ったので送る、と云われ誠に因縁めいたレコードになりました。ホセ・ボールが夫人のエバ・ボールの作品を演奏するという、理想的な組み合わせのこのレコードは、私の最大の愛聴盤で、ダンス教室ではいつも流れています。

ラ・クンパルシータ　　Ｅ・ビアンコ楽団

若い頃、当然のようにギター教室に通いましたが、当時、教室に誰にも弾かれずケースに入ったままのガット･ギターに妙に惹かれていきました。ガット弦（羊腸弦）はスティール弦と違って、弦が伸びて音程が不安定で扱いにくいものでしたが、どっしりした落ち着きのある音に魅力がありました。このレコードも鷹揚なタンゴの先輩の家に誘われ、何度もリクエストしながら、この楽団の演奏の終盤、ピアノソロに導かれて弾かれるガットギターのソロを息を詰めて聴いたものでした。ガットギターで唄われるタンゴはガルデルやマガルディを例に出すまでもなく、素晴らしいものです。

生演奏の代用品だったＳＰレコードも、優れた演奏家が大方亡くなり、名演を再現することも出来ず、その演奏を現実聴けない今、その立場は逆転してしまい、ＳＰレコードはライブを超えたわけで、名手たちがとりなおしの効かない一発録音にかけた心意気のこもったタンゴを聴きながら「至福の時間」を持てるのです。

Ｅ．ビアンコ

〝アポロヒーア・タンゲーラ〟の系譜

齋藤　冨士郎

“アポロヒーア・タンゲーラ”、“ビエハ・ギタラ”、“センチミエント・マレーボ”をロシタ・キロガの３大名唱と呼ぶことにはそう異論はないと思う。

キロガが“アポロヒーア・タンゲーラ”を録音したのは1952年で、歌手生活を引退した1931年からすでに21年を経過していたが、そんなブランクを全く感じさせない名唱である。「タンゲ名曲事典」によれば“アポロヒーア・タンゲーラ”が作られたのは1930年代始めで、ロシタ・キロガ作曲、エンリケ・カディカモ作詞となっている。そして1933年にキロガに先駆けてアルベルト・ゴメスがこれを録音している（A.M.P. CD-1124）。そして興味あることはキロガ自身が同じ曲を1930年に“エル・タイタ・デル・バリオ”というタイトルで録音していることである（Víctor 47606B）。そこでは作者はアントニオ・ポリート＝フェリーペ・H・フェルナンデス合作となっている。この録音はLP復　刻（DISCO LATINA, DL 110）されており、故寺田太作氏が解説を書かれているが、それによると「昔から伝わっている曲をフェルナンデスとポリートが編曲したもので、キロガは後にもっと練り上げて“アポロヒーア・タンゲーラ”の曲にした」とある。その「古くから伝わる原曲」がどんなものかはこの段階ではわからない。

最近、ヤフー・オークションでel bandoneónから出ていたＣＤ２枚組の「TRIO ARGNETINO IRUSTA-FUGAZOT-DEMARE EL TANGO EN BARCELONA（EB-CD 45,46）」を入手した。インターネット・オークションはリスクも伴うが、この場合は現物に全く問題はなく、価格も1000円以下であった。そのCD1（EB-CD 45）の20曲目にルシオ・デマレのピアノ伴奏でアグスティン・イルスタとロベルト・フガソがドゥオで歌う“ミロンガ・クリオージャ”という曲が入っている。作者はアルトゥーロ・マトン（Arturo Mathon）と記載されている。私には全く初めての曲であったが、聴いているうちに「はて、どこかで聴いたことのある曲ではないか」と気が付いた。どうもそれは“アポロヒーア・タンゲーラ”であるらしい。

アルトゥーロ・マトンという名前は我々がよく利用するANUARIO DEL TANGO（いわゆる「過去帳」）に記載があり、それによると1887年生－1933年没で、主に1910年代に歌手として活躍したとある。彼が1913～1914年にコロンビア・レーベルに録音した“エル・アパーチエ・アルヘンティーノ”（T860）はCD「ANTOLOGÍA DEL TANGO RIOPLATENSE」に収録されている。もし彼が作曲者と同一人であるならば“ミロンガ・クリオージャ”の作曲もその頃ではないかと想像される。あるいはもっと昔からあった曲を彼が採譜・編曲した可能性もある。

結局のところ、1910年代あるいはそれ以前からあった曲がいろいろな人々の手を経て、最後に“アポロヒーア・タンゲーラ”としてキロガの名唱に結実したと考えられる。タンゴの世界にはこうした話は少なくないだろう。

このトリオ・アルヘンティーノの2枚組CDは全43曲の収録曲のうち、オルケスタ・アルヘンティーナ・イルスタ＝フガソ＝デマレによるインストルメンタル演奏は３曲しかなく、他は殆どがデマレのピアノ伴奏によるイルスタ又はイルスタ＝フガソの歌ばかりである。それで私は彼らがトリオ・アルヘンティーノというグループ名を名乗っている訳が理解できた。

余談であるが、ヤフー・オークションは注意して利用するとかつて入手し損なったLPやCDなどが格安で入手できることがある。

（横浜プーロ・タンゴ同好会会報（No.242）所載の原稿に補筆し、画像を追加して転載）

ガルデルからの最後の手紙

…LA ÚLTIMA CARTA QUE RECIBÍ DE GARDEL…

抄訳：弓田　綾子

ULTIMA CARTA QUE RECIBI DE GARDEL

"Bogotá, 30 de junio de 1935. Querido Armando:
Tuve ... de encontrar en el Consulado cuatro
... y te imaginarás con qué ansiedad me
... tus relatos. Desde luego, me afectó extra-
ordinariamente la noticia de la muerte del pobre Al-
fredo Deferrari, a quien yo le hubiera dado cien años
de vida por su excelente condición. Ya mandé el pé-
same a la familia y te ruego que vos también expreses
a esa pobre gente todo mi pesar. Cuando el pobre
había encontrado la felicidad en su hogar recién cons-
truido ocurre esta injusta desgracia... Que Dios le am-
pare... Las noticias que enviaste sobre El día que me
quieras me produjeron mucho placer. Yo vi la película
aquí en Bogotá, en privado y Paramount de ésta está
loca con el film. ¡Con decirte que van a lanzarlo en
cinco teatros al mismo tiempo en una ciudad donde
hay apenas quince cines!... A mí la película me vol-
vió a causar una impresión inmejorable y sigo cre-
yendo que es mi mejor trabajo cinematográfico y que
hemos matado el punto con las canciones. Me alegra
la noticia de que se estrena en julio y espero que
llegaré con los laureles frescuitos a Buenos Aires.
Acerca de Tango Bar a pesar de la carnicería, resultó
un formidable éxito en una privada dada en New
York. Por primera vez en una privada dada en New
españolas, el público aplaudió y yo recibí ...
felicitaciones. La Paramount de New York ...
un cable diciendo que era mi mejor película

1935年６月20日、ボゴタ市にて

親愛なるアルマンドへ

嬉しいことに領事館で貴方の４通の手紙を受け取りました。手紙をわくわくしながら読みました。手紙の中に書かれていたアルフレッド・デフェラーリの死のニュースにはとてもショックを受けました。彼はとても素晴らしい人でしたから…。ご家族には弔電を送りましたが、もしご家族に会う機会があったら、私が心からお悔やみを申し上げますと伝えて下さい。本当に気の毒です。彼はやっと幸せな家庭を築き上げたばかりだというのに、こんな不幸が起きてしまって、なにとぞ彼に神のご加護を…。

献花をする親友アルマンド

貴方が送ってくれた「El día que me quieras（想いの届く日）」の知らせを見たときはとても嬉しく思いました。私はこの映画をボゴタで観ました。パラマウント映画会社もことのほか高く評価しており、５ヵ所の映画館でこの７月に上映することになりました。ボゴタは小さな町で映画館は15館しかありません。その中での５つの映画館で同時に上映されるのはとても凄いことです。この映画は私としても申し分のない作品で、私の映画の中でも最高のものだととても誇りに思っています。ブエノス・アイレスに帰るときは、栄誉に包まれて堂々と胸を張って帰国したいと願っています。

「Tango Bar」という映画については、ニューヨークで非公式で上映されましたが、とても高い評価を得ました。初めてスペイン語の映画が評価

されたのです。観客からは喝采を受け、お陰で私は多くの人たちから祝福を受けました。ニューヨークのパラマウント映画会社からも祝電を貰いました。素晴らしい映画だと言ってくれたのはとても嬉しいことです。こんなにも祝福され“夢ではないか”と思ってしまいます。

今の公演ツアーは終わりに近づいて来ています。来週はパナマへ行きます。７月の上旬にはハバナにいます。是非ハバナに手紙を下さい。コロンビアは決して裕福な国ではありませんが､有り難いことに映画館はいつも満席です。ボゴタでは熱烈な歓迎を受けました。

そうそう、飛行場では大変なことがありました。大歓迎を受けたものの、あまりに大勢の人々が駆け寄ろうとしたので、事故を避けるためにパイロットは飛行機を半回転させて別の滑走路に着陸させました。もう一つは私の使用人の鞄が盗まれてしまったことです。そこには私のお金が入っていましたが、大した額ではなくしかもコロンビアの通貨だったのは幸いでした。

まもなく上映される「El día que me quieras」の音楽をよく聴いてほしいのです。ここでの唄の数々はきっと貴方にも衝撃を与えることでしょう。

以前の「Cuesta Abajo（下り坂)」の音楽を間違いなく凌駕したと思うからです。また、レコードも素晴らしい仕上がりになっています。こうしたことを知った上でこれからパナマへ向かって出発します。飛行機に乗っての長い旅が始まります。ギタリストたちの大騒ぎが判るでしょう。この飛行機の速さと居心地の良さを囃し立てていますが、これから何時間飛ぶことになるか。

この三発機に乗り込んだ時のこわばった笑顔が見ものです。では、皆さんに宜しく伝えてください。

パナマを出国する前に、また、手紙を書きます。キューバで貴方の手紙を待っています。

抱擁を送ります。親愛なる古き友よ！

カルロス

1935, Medellín.
Una de las últimas fotos de Carlos Gardel.
Junto a él, Alfredo Le Pera
（メデジン市、1935年。ガルデル最後の写真の一枚。隣はアルフレド　レ　ペラ）

＊この手紙は、亡くなる４日前（1935年６月20日）に、親友“Armando Defino”宛に書いたガルデル最後の手紙となったものです。

蛇腹三題噺（偏屈お爺さんの趣味）

山本　雅生（神戸）

大切な紙面を遣い、毎度くだらないお話しで申し訳有りません。

私は、諸兄の様にタンゴを「学術的」に論じる事が全く出来ない者ですので、貴重な紙面を拝借するのに気がひけるのですが、恥も外聞も投げ捨てて紙面を汚させて頂きます。世の中には色々な諺が有るのですが「無くて七癖」と云われる様に人それぞれに色々な道楽を楽しんで暮らしていると思いますが、中には定年後全くする事が無くて奥様に疎んじられる方も居られる様ですが、我がＮＴＡの会員諸氏は楽しい道楽と共に充実した毎日を過ごされて居られる事と存じます。

バンドネオン

下らない前置きはこれ位に小生の道楽について少しお付き合いをお願い致します。

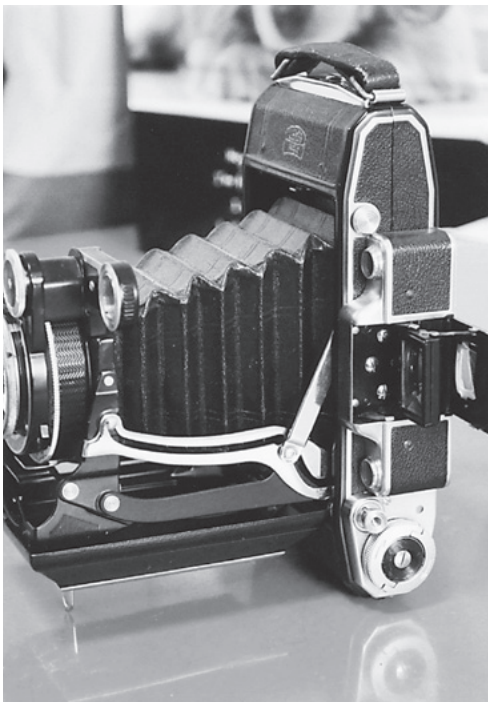
初めて道楽と云う楽しみを持ったのは、中学に入った時（入学の時学校が空襲で焼けてしまって、遠くの小学校に仮住まいをした）思いも掛けず電車通学になって鉄道を利用する事になり、電車だけでなく汽車（蒸気機関車の牽く列車）も使う事になって「鉄道フアン」になったのが最初で、家の近くに山陽電車の西代（にしだい）車庫と神戸市電の長田（ながた）工場、国鉄の鷹取工場などが有り、条件としては最高！だったのです。鉄道フアンの常道として、まず機関車・電車などの写真を撮る事の楽しみを知ったのです、貧乏家庭のドラ息子にカメラなど持てる環境など有りませんが、「蛇の道は蛇」とは良く云ったもので、お金持ちの友達を誘い込んで病原菌をうつし、一緒に撮影に行けば良いと云う事を編み出したのです、そうこうするうちに学校も新制高校とやらに移行、自動的に高校生となったのでした。

勉強部屋？に並４のラジオが入り、音楽などを聴いているうちに何となく「中南米音楽」（ルンバ等）のラテン音楽に興味を持って聴く様になっていったのです、大学などには行

けるはずも無く、就職をし一端のお兄ちゃんになって、悪ガキ仲間と、当時流行っていた「ダンスレッスン場」に行く様になり、ラテン系の音楽にも国に依っての違いを知る事になったのです、そして一番性に合ったのが「タンゴ」だったのです、その時タンゴと云えばかかったのが「カステリアンズ楽団」のラ･クンパルシータ（ＳＰレコード）だったのです、一曲ごとに電蓄の針を替えて曲の最初に乗せる作業は生徒の役目でした、そうこうするうちに大阪の法円坂に有った「教育会館」？へ「中南米音楽研究会・大阪支部」のレコードコンサートを聴きに行く事になり、音楽はタンゴになったのです、そこでは熊谷さん・杉本さん・芝野さん等とも交流をさせて頂いたのです。（芝野さんは鉄道フアンでも一流で特に古典機関車に詳しい）

その後ラジオ神戸のリクエスト名簿から「神戸ポルテニア音楽同好会」が発足、現在に至っています。「タンゲアンド エン ハポン」で見ていただいている「神戸発 上田・山本タンゴ写真館」で一緒に写真を出している「上田 登」さんは50数年にも及ぶ神戸ポルテニア音楽同好会の仲間で、今でも兄弟としてお付き合いをしています。（タンゴ写真館の写真は当時最高のニコンＦで写しました）鉄道フアンの方も、各地の同好会が発展的に「鉄道友の会」として全国的な組織になって現在に至っていますが、最初期の頃まだ大学生であった「柴田重利」さんと云う方が神戸に来られて日本一と云われた神戸市電の案内をした事が有ったのですが、別れる時彼のポケットから出てきたメモに「藤沢嵐子」さんの文字を見つけて彼もタンゴフアンで有る事が判り、話に花が咲いたのでした。

こんな事をきっかけに、音楽はタンゴを一生の道楽に決まった様です、他にタンゴと鉄道を道楽にしている仲間には、彼の有名な「芝野史郎」さん、先年他界をされた「蟹江丈夫」さんなど結構おられる様です。カメラの方はと云うと若い時買えなかったカメラも、お小遣いに少し余裕が出来て来ると、あれこれと買い集め部屋の至る所にのさばって現在約260台余りがゴロゴロとしています。


スーパーイコンタＶ

表題の「蛇腹」なんですが、ここまで読んで頂いた方は“ははぁ!!?”成る程と気がつかれた事と思いますが、

1　鉄道には列車の連結部に幌（蛇腹）
（昭和26年４月24日の横浜市桜木町事故は前後車両間が通行できなかった

のがあの大事故の一つの原因でも有った）

2　写真ではスプリングカメラのレンズ部と本体の間に蛇腹が有り、そして引き伸ばし器のレンズ部とランプハウスの間にも蛇腹が有る。

3　タンゴでは「絶対楽器」であるバンドネオンの中央部に蛇腹（コンサートではこれを見るのが楽しみ）

と全て蛇腹（幌）の存在が無くては成り立たない大切な部分品で有る事から、この様な役にも立たない妄言のお付き合いをお願いした次第です、タンゴ以外のクラシックカメラ・鉄道の事など興味をお持ちの方、楽しい交流を致しましょう、お便り下さい。

そんなこんなで、現在所属をしている「道楽」のグループは

神戸ポルテニア音楽同好会
日本タンゴ・アカデミー
鉄道友の会
神戸鉄道大好き会
神戸クラシックカメラメンバーズ

等ですが年寄りの体力作りとしてボウリングのターキークラブにも所属をして楽しんでいます。（大きな声では云えませんが年会費は「日本タンゴ・アカデミー」が一番高い。）

姫路モノレール

時折聞くのですが、定年になって時間に余裕が出来たから、なにか趣味でも始めようか？と云う人もいますが、とんでも無い事で、定年になった時ちゃんとした趣味で人脈も有って、忙しい様でなければ趣味とは云えないと思うのは私だけでしょうか？

愚にも付かない妄言にお付き合いをして頂きまして、有難う御座いました。

「タンゴと浮世絵」

勝原　良太（四日市）

三年半前に突然タンゴフアンになった私は、聴いてゆくうちに古典タンゴの素朴な哀感に惹かれ、今では1920年代のタンゴばかりを聴いています。

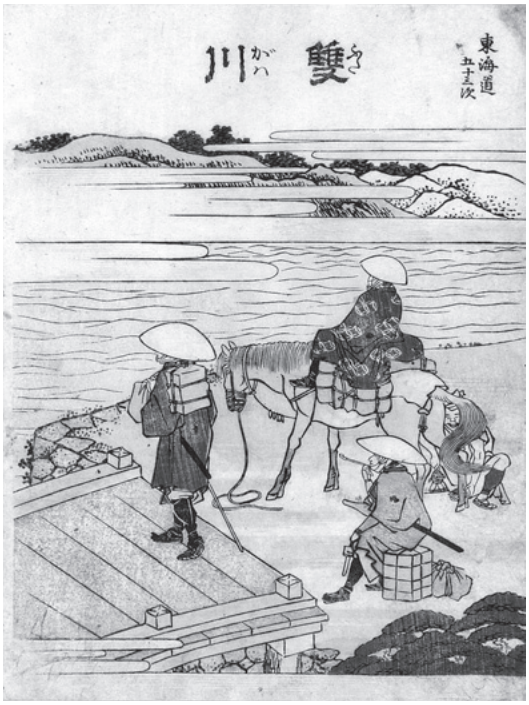
私が聴いた感じでは、多くの古典タンゴはタンゴ本来の二拍子を強く感じさせ、アンサンブルでもリズムより前のめりに奏されます。メロディがリズムの上に安定して乗っかるというのではなく、不安定で不揃いですが、それが不思議なくらい妙味を伝えます。音楽のスタイルそのものも、1910年代のハバネラから20年代のタンゴへの生まれ変わりは、まるで幼虫から蝶への変身（サナギの段階が無い）にも似て、ハーモニーの豊かさや効果的な副旋律など、その充実ぶりには目を瞠（みは）るばかりです。古典タンゴはこのように、急速に発達し始めた音楽性と、本来の民族性が拮抗（きっこう）して、この時期のタンゴにしか無い、汲めども尽きない魅力を持っているようです。

このようにタンゴを楽しんできた私ですが、ヴィジュアルの世界では浮世絵版画が私の好みで、23才の時から今に至るまで、ずっと続いています。タンゴと浮世絵版画はずいぶんかけ離れた感じがいたします。しかしレコードと版画はメディアこそ異なりますが、複数芸術といいますか、両者共に多数の民衆を相手にしているという点で、共通した性格を持っています。民衆を相手として商品をたくさん売ることが至上命令とされていますから、当然トレンドに敏感です。敏感ですが、時勢より二歩も三歩も先を行ったのでは売れません。時勢に歩調を合わすか、半歩先を行くぐらいでないと、民衆はついてきてくれません。その為タンゴも浮世絵版画も、その性格として、民族性、通俗性、風俗味を強く持っています。そして私は、そこから生じる匂い、肌あい、といったものに強く惹かれます。民衆芸術には必ずこのようなものが備わっていて、そうであるが故に多数の民衆に支持されて流行（はやり）となります。この流行、廃（すた）りこそ民衆芸術の特徴であり、ひとたび時代が移ってしまって後の時代になると、過去の風俗を担った作品は、二度と奪い返せないその時代の真実を伝えて、これこそが作品の最大の魅力になります。時代の刻印が打ち込まれているといっ

たらよいのでしょうか。

タンゴのSPレコードのラベルには、ランチェラとか、パソドブレとかタンゴのように、レコードを聴いて踊る、その踊りの種類が書いてあります。つまりこれらのレコードが演奏録音されて売り出されたのは、踊ってもらう為だったことがわかります（もちろん聴いて楽しんだ人もいたでしょうが）。パチョもマルクッチもフレセドも、レコード購入者が畏まって聴くような純粋鑑賞を期待して録音に精出していたのでないことは明らかです。しかしそれでいて、80年90年たった今日、タンゴファンが50回100回聴いても飽きがこないような音楽が演奏されていたという、そこが素晴らしいと思うのです。

そしてそれと同じことが浮世絵版画についてもいえます。皆様ご存じの歌麿も広重も、浮世絵師は皆、生前一介の画工であります。板下画工といって、版画の下絵を作成する画工――つまり絵師ではなくて職人として待遇されていたのです。そして当時彼らの作品は絵画として鑑賞されるのではなくて、芝居の記念品、思い出であり、江戸の美人の報道写真であり、東海道を往来する人々のおみやげ品であったのです。つまり民衆の娯楽の為に供された風俗商品にすぎなかったのです。しかしそういった作品を描くことに、浮世絵師たちが仕事としての情熱を傾けた結果が、欧米の美術愛好家たちに、日本芸術のNo.1は浮世絵版画であると認めさせるほどになったのです。こういったあたりに、タンゴも浮世絵版画も、同じ風俗芸術としての血が流れているのを感じて、私は感動を覚えます。



「タンゴと浮世絵」。片や音楽、片や美術。生まれた国も時代も異なりますが、人といい趣味といい、一見して間柄は遠くても、文化の深いところで根を同じくしていたり、又思いがけない繋がりによって出会いがあったりするものと、改めて感じ入ったことでした。

Tango bar めぐり

雑司が谷「エル・チョクロ」

町田　静子（杉並）

タンゴバー「エル・チョクロ」はアカデミー会員でもある伊藤修作・りえ子ご夫妻が準備期間を経て、昨年10月に開店。地下鉄副都心線雑司が谷駅から歩いて３分、住宅街の角に柔らかな灯りにつつまれてひっそりと建つ。

扉をあけるとそこは、ピアソラのタンゴオペラのヒロイン「ブエノスアイレスのマリア」が微笑む異次元の世界が広がる。

その佇まいは実に斬新。

自宅の築70年の日本家屋を利用して造作。

母上が長年愛用していた丸テーブルはカウンターの一部となり、床の間はインテリアとしてとけ込んでいる。ネットワークで集めた廃材がいたるところに効果的に使われ、趣のある和洋折衷のタンゴバーとなった。

島﨑会長、飯塚副会長をはじめ、10人の有志が参加。和室だった広い漆喰全面に描かれた「ブエノスアイレスのマリア」の前で。まさに圧巻。「エル・チョクロ」のシンボルとなっている。

漆喰の高い天井は欄間と見事に調和。

音が反射して抜群の音響効果をもたらし、心地よい空間でタンコを聴くことができる。

この日伊藤氏は「Época de oro」シリーズからフレセド、フィルポ、カナロ、パチョの名演LPをセレクト。真空管アンプを通して６本のスピーカーから流れる音は、かぐわしい香りに満ち溢れていてしばし語らいを中断。「Agua mansa」、「Sábado inglés」等名演奏の息づかいに酔いしれた。

「ブエノスアイレスのマリア」が描かれた前はグランドピアノを設置。現在月２～３回のペースでプロのタンゴライブを開催している。その他、毎週木曜日には、アルゼンチンタンゴの生演奏を予約なしに気軽に聴けるサロン・デ・タンゴを開催。スケジュール等はこのHPへ。〈http://el-choclo.com〉

ピアノの前は踊れるスペース。サロンタンゴを踊るもよし、タンコの名演をじっくりと聴くのもよしだ。

←　当日ご一緒したタンゴ歌手のユリ・アスセナさんが飛び入りで「Loca」と「El choclo 」を軽妙なトークとあわせてご披露。満員のお客様を魅了した。

りえ子さんのセンスが光る美しく盛り付けられたお料理。プチトマトとハーブはお店の裏庭で栽培した穫れたてのもの。新鮮なプチトマトは甘さがじわ～と広がる。

最後の締めは伊藤氏お手製のカレー。抜群に美味しかった。

チリ産のワインを飲みながら、美味しいお料理をいただき、タンゴの名演奏をこだわりのいい音で聴き、そしてタンゴを踊る……．　まさに至福。

「エル・チョクロ」は、タンゴファンにとどまらず、大人が時間を忘れ、ゆったりとくつろげる素敵な空間だ。お酒が飲めない方でも珈琲をはじめノンアルコール類がラインナップされている。

お一人でも仲間うちでも、時空を超えた幸せなひと時を過ごしにお出かけ下さい。

南米３カ国タンゴダンスツアー PART2

海部　英一郎（藤沢）

私は2008年２月10日から３月10日の１か月、12人の仲間とペルー、チリ、アルゼンチン（以下ARG）の南米３ヵ国のダンスツアーを実施、リマ・サンチャゴ・ブエノスアイレス（以下BsAs）のミロンガで踊りました。リマ、サンチャゴの踊り場では、あまりお上手な女性にぶつからず、同行の日本女性たちの方がはるかに上手なのを認識しました。2010年、我がサークルが創立20周年を迎え、それを記念して南米３か国ダンスツアー・パート２を企画したのですが、さる高名なダンスの先生に会報（タンゴ情報誌）の記事について、裁判を起され延期しました。幸い2011年３月裁判上の和解が成立し、すぐ準備に掛かりました。今回はまず2009年９月、タンゴがユネスコの無形文化遺産に指定されており、その申請国のウルグァイ（以下URG）とARG、それにいつもカーニバルの時期に行ってタンゴを踊れなかったブラジルの３か国の踊り場を訪ねることにしました。出発は2011年10月７日、一行は13名で、帰国は11月７日、やはり１ヵ月の旅でした。

ブラジル　リオのカーニバルではサンポドロモ会場の大デレゲーションを見る他、いつもスカラ（通常は劇場）でサンバを踊りますが、誰も踊ってない大フロアーで真っ先に踊りだし「日本人が真っ先に踊るなんて…」と驚かれたこともあります。しかしこの時期リオ・デ・ジャネイロはすべてサンバ一色で、タンゴの踊り場も従業員が全部休むので開いていません。

今回リオ・デ・ジャネイロではまずボタフォゴ（Botafogo）地区のスタジオでヴァウデシー（Valdecí de Souza）と言う先生が開いているミロンガに行きました。１階と２階にフロアーがあり、メインの２階は200㎡ほどの会場で半分が踊り場、あとのスペースの半分位にテーブルを置いて、飲

ブラジル・サンパウロ
アルシオーネ先生のスタジオの入り口で

んだり食べたり出来ます。もうかなりの人が踊って居り、我が仲間もさっそく踊りの輪に入っていきます。私は取材で主催者にインタビューなどして、踊りませんでしたが、仲間のＯさんが寄せてくれた感想では『最初に踊っていた数組の踊りはミロンゲーロスタイルでカップルが１つになった見事な踊りだった。しかし後で４～５人と踊ってみて、初心者同然の人もおり、最初はサークルの中の熟練者が露払いしていたのかもしれない』と言っていました。

２日目の10月９日はサン・パウロのルア・ホアキューム・フロリアーノ（Rúa Joaquim Floriano1063）のアルシオーネ・バローセさんのスタジオに行きました。スタジオはやはり１、２階があり、昨日の会場より大きく、２階は板張りで設備は宜しい。アルシオーネさんは元バレエダンサーでテアトル・モニューバのプリマドンナだったそうです。ここはハンサムな若い男性が女性の相手をしてくれるシステムで、女性には喜ばれました。前述のＯさんは『４，５人と踊り、レベルは必ずしも高くないが、初心者でも密着ホールドで丁寧にリードすればリズムに乗った踊りを楽しめた。何となく文化の違いを感じた』と言っています。リオでもサンパウロでも市内のタンゴの踊り場は３～４カ所と言う事でした。

ウルグァイ　モンテビデオには10月22日（土）から24日（月）の２泊３日で訪れました。第１日の夜はまずエル・ミロンゴン（El Milongón）と言うタンゲリアに行きました。ここはフォルクローレとタンゴのショウを見せますが、歌手はガブリエル・スカローネ（Gabriel Scarone男性）、リナ・バチェコ（Lina Pachecod女性）の２人がタンゴ、ウーゴ・サントス（Hugo Santos男性）がカンドンベを歌いましたが何れも良い声で声量があり、聞かせました。しかしダンスは２組出ましたが、共にお粗末で、BsAsと大きな差を感じました。

はねてからガイドとバスに延長料金を払う事にして、ビエハ・ビオラ（Vieja Viola）と言うミロンガに連れていって貰いました。モンテビデオの旧市街らしく、何ともうらぶれた細い道をくねくね走って着きました。入場料は120ペソ（約500円）地元の年配のカップルが多い。東洋人の客は珍しいらしく、女性たちはすぐ誘われて踊り出しました。男性も暫く女性を物色してから踊り出しましたが、ここではBsAsと違いカブセヨの習慣が無いらしく、楽しく１時間を過ごしました。

２日目は当地では多分一番有名と思うホーベンタンゴ（Joven Tango）にホテル（ホリデイ・イン）から歩いて行きました。入口に置いてあったプログラムを見ると10月21日から30日まで第24回インターナショナル・フェスティテパル“ビバ・タンゴ”が行われており、フランシスコ・カナロへのオミナーへの意味もある10日間の様でした。入場料は90ペソ（約360円）。この日は15時半から演奏会が行われており、サンルイスタンゴと言うARGの楽団が演奏しており、歌はURG人のラモン・リバダビアとARGのデュオ“エル・パルコン”共に凄い声量で楽しめました。踊りはこれまたARGから来ているコンパニア・コレオグラフィカと言う舞踊団で可も無し不可も無しの踊り、中に10代の男女のカップルがおり、将来のグローリアとエドゥアルドになるかも知れないと後で写真を撮らせて貰いました。21時半からミロンガタイムになり、メインの会場は石床ですが、隣の別室は板張りのホー

ルで、我々にはこちらの方が遥かに踊り易いので皆こちらに移りました。12時になってまだ踊ると言う１人を残して帰り支度をして出口に向いましたが、口々に「もう、帰るのか」と引き留められます。人懐こい人達でした。

ARG BsAsではタンゲリアは「エル・ビエホ・アルマセン」と「タンゴ・ポルテーニョ」に行っただけ、あとはミロンガ廻りとダンスレッスンの17日間でした。（私のARG滞在は21日間ですが、うち４日間はエル・カラファテ中心にパタゴニアの氷河ツアーに行きました）。踊ったミロンガはコンフィテリア・ラ・イデアール（Suipacha 384）、スンデルランド・クラブ（Lugones 3161）、クラブ・グリセール（La Rioja 1180）、サロン・カニング（Scalabrini Ortiz 1331）、ラ・バルドーサ（R.L. Falcón 2750）、エル・ベッソ（Riobamba 416）の有名ミロンガ６か所の９回、大した事ありません（実は今回は日系１世の方が経営するペンションに泊まったのですが、ご主人が鍼マッサージの先生で、２回ほど治療を受けた所、足が痛くて歩くのが精一杯と言う日が１週間ほどあったのが響きました）。仲間は遥かに多いミロンガ廻りをしており、前述のＯさんなぞ19日間で31カ所回ったと言う剛の者もいます。レッスンはグラシエラ・カブレラ、ルナ・ホセ・マリアとラウラ・マンヒオーネ、河島ミキ、平井光二の４人で、過去の経験で日本語で受けられる人だけにお願いしました。

スンデルランド・クラブは普段は体育館

エル・ベッソ、ここも密着スタイルが良い

スンデルランド・クラブはかねがね行きたかった所で、会場は広い体育館、嘗て渋谷でスタジオを開いていたホセとラウラ、大阪から来ている２人の女性も一緒になって楽しく過ごしました。イデアールは３回ほど行きましたが、最初の１回は河島ミキさんのレッスン日でした。「皆さん勝手に踊っていて下さい。気が付いた事を私が直します」という日本にはないレッスンで、帰って早速我がサークルでもやっています。グリセールは所謂ミロンゲーロスタイル発祥の地、皆一様に密着スタイルで見事に踊っていました。カニングでは日本でGYU君と組んで活躍していたLAMちゃん（日本女性）や古いタンゴダンス仲

間の重松さんに会い、名古屋から移住しているジュンコ（森潤子）がパートナーのレネと組んでパフォーマンスを演じていました。エル・ベッソはカブセヨ（アイコンタクト）しやすい雰囲気の会場で、モナ・リザそっくりの女性と踊りました。またここではよく東京のミロンガで顔を合わすフランス人のミッシェル君に会い、東京での再会を約して別れました。

今回の３か国訪問で感じたのはブラジルの元気です。ご承知の通り経済好調で、2014年のサッカーワールドカップ、2016年の夏のオリンピックが決まっており、新しいホテルやビルの建設ブームで沸いていました。時々行くボタフォゴのシラスコ料理のエストレラ・デル・ソルで2000年行った時ガイドに「遠慮せず沢山肉を取ってどんどん残してください。それを待ってる人達がいるんです」と言われ、成程出口には子供や女性が屯していました。しかし今回は一人もいません。但しバブルから未だ立ち直れない日本に居る人間としては、はじけた後について、つい心配してしまいます。

ARGでは平井光二さんにカブセヨの方法を教わりました。彼はIT関係の技術者をしていたそうですが、ある時タンゴダンスにはまり、始めて３か月後BsAsに飛んできました。「何か違う。ここに住みたい」と夫人と一緒に来て６年前からボエドに定住しています。ここで日本人に部屋を貸したりレッスンをしていますが、ある日仲間と一緒にカブセヨのお作法を教わり、それが今回のBsAsのミロンガ廻りで随分役に立ちました。

与えられた紙数が尽きました。言いたい事の10分の１も書けませんでしたが、詳しい事は私が発行している湘南アルゼンチンタンゴダンス同好会の会報に連載中ですから、そちらを参考にしてください。

（終わり）

（湘南アルゼンチンタンゴダンス同好会）

神戸市垂水区　労働市民センター内レバンテホール

（写真：山本雅生さん　2011年秋号の“嬉しい石像を発見”参照）

「カルロス・ガビート」を目指して

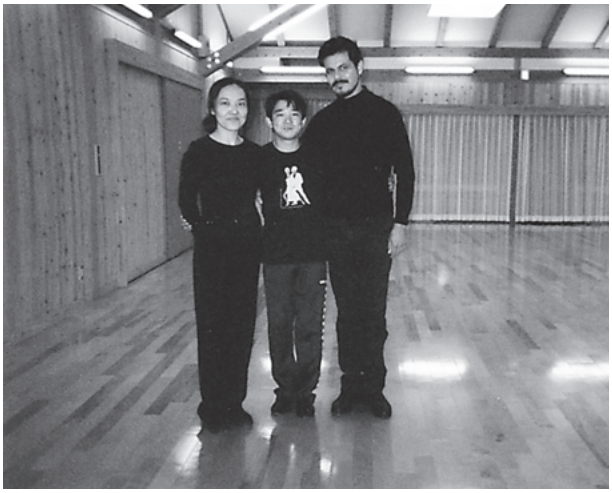
映像で見た憧れのタンゴダンサー「カルロス・ガビート」に近付きたくて、羽田に降り立ったのはもう十数年前のことです。修学旅行以来で、地理も分からず、ただ「本物のタンゴを感じたい」その一心だけで東京の街を彷徨いました。最初に観たのは「フォーエバータンゴ」東京公演でした。初めて見る「本物のステージ」の迫力と素晴らしさに感動し、「自分にはタンゴしかない」そう確信しました。

まずは「アルゼンチンタンゴダンス協会」の小林先生にご挨拶をし、タンゴシューズを持たなかったので、先生の紹介で銀座の「せきね」に買いに行きました。当時は、まだまだタンゴダンスもメジャーではなく、タンゴシューズというのは売っていなくて、社交ダンスのラテン用シューズを買った記憶があります。

実をいうと、生涯で最初にタンゴを習った先生は、山村信吉・青柳　静先生です。初めての場所で、初めてのタンゴ、初めてのアブラッソ。緊張の塊だったことを今でも思い出します。ぎこちない私にお二人で熱心に教えて頂きました。さらに下落合の「すいよう会」まで紹介して頂き、初ミロンガまで体験させて頂きました。翌日が、小林先生の「アルゼンチンタンゴダンス協会」でした。熊本から遥々習いに来たということで、大変喜ばれ、安部　恵先生にご指導頂きました。都会の女性らしく華のある雰囲気でこれまた緊張しっぱなしでした。「なかなか覚えが早い！」「スジがいい！」などと褒めて頂きましたが、それもその筈、二人で組んで、相手のバランスを考えながら足を動かすこと、つまり、柔道を高校時代やっていたのですから。「ガンチョ」は「大内刈り」「小内刈り」とか似ているな～と思っていました。夜は、確か六本木・赤坂・青山を見学して回ったと思います。一人で飲みに入る勇気もないので、ひたすら街を歩き回ったものでした。

東京での「タンゴな日々」はあっという間に過ぎ、熊本に帰りました。地元では習う先生がいないと思っていたところ、福岡のオスカル・ベラスケス・横山倫子先生が熊本で教室を開いていることを聞いて早速入門しました。しかし、東京で教えて頂いたものとは、かなり違っていて最初は戸惑いました。教える先生で違うとは聞いていましたが、確かに実感しました。

最初に先生が「基本を１本しっかり身につければ、後は他の先生にも習いながら自分のタンゴを作っていけばいい」と話されたことが印象に残っています。どれが正しいとかではなく、山村先生も小林先生もオスカル先生もそれぞれに自分のタンゴを追及していらっしゃるということに気付かされました。それからは、オスカル先生の指導の下、練習に励みました。タンゴ仲間も増えたり減ったりの繰り返しでしたが、年々浸透してきたような感じでした。



福岡から熊本に指導に来ていただいた
オスカル・ベラスケス、横山倫子先生と
長年の先生です

たまに上京するときにはタンゴ関係のお店をハシゴしました。と言っても当時はそんなに教室も多くなかったので、小林先生の所やトロピカーナ、六本木、五反田、高田馬場などです。唯一残念なのは、「カンデラリア」が閉店される前に行けなかったことです。京都に行った際は、「インペリオ」のルシア先生とアルバロ先生、あと一人ダニエル先生にご指導頂きました。どのクラスでも遥々熊本から来たということで、温かく迎えて頂きました。

数年経ったある日、ニューヨークでタンゴダンスを教えている熊本出身の藤田真紀先生がワークショップを郷里で開催されるということで早速参加しました。その後、熊本に越して来られることになり、ご主人のエルナン・ゴメス先生とともに「タンゴフィーバースタジオ」を始められ、そこにも第１期生として練習に通いました。その頃は「タンゴに飢えていた！」というのでしょうか。本当にタンゴ漬けの毎日でした。沢山の先生のレッスンを受けましたが、どの先生からも共通して言われることがありました。それは「音楽をよく聴くこと」です。「曲を知らないでタンゴは踊れない」ただ音に合わせて体を動かすだけの「踊り」とは違う！ということでした。

熊本で初のタンゴ教室
タンゴフィーバースタジオの第一期生の皆さんと
中央の男女がエルナン・ゴメス、藤田真紀先生

生まれて初めて東京で見た本物のタンゴ。私の脳裏に焼きついている「カルロス・ガビー

トのタンゴ」も正に音楽そのものでした。

「人生のパートナー」を見つけて

「もっとタンゴを理解したい！」こんな想いはタンゴに関わった人なら誰でも持つはずです。「タンゴを知ること」それが「日本タンゴアカデミー」に入会するきっかけでした。

初めは入会したものの、東京での会合には、日程などが合わず参加する機会がありませんでした。そこで、送られてくる機関紙を毎回楽しみに読んでいると、作曲者や演奏家の意外な一面や曲の内容・当時の時代背景が手に取るように分かりました。それと同時に、会員の皆様の人生とタンゴが切り離せないことも分かり、感動すると同時に、踊りだけではない楽しみ方を教えて頂きました。そして、いつか自分も機関紙に記事を載せて頂けるように「タンゴを自分のものにしたい」と思いました。

そうしているうちに時は過ぎ、私にとってはある大きな転機が訪れました。それは、交通事故に遭ったことです。2004年８月15日、お盆ということで、たまには親孝行をと考え、山あいの温泉に車に乗せて行った帰りのことでした。対向してきた大型乗用車が中央線を越えて突っ込んで来ました。避けようにも片側は山、片側は谷、とっさにハンドルを切って山肌に車を擦りながら急ブレーキ。しかし、相手が突っ込んでくるのは避けられず正面衝突し、車は大破しました。突っ込んできた相手側は軽症だったのですが、こちらは私と母が骨折と打撲、父が脳挫傷と頭蓋骨陥没骨折の重傷でした。救急車もお盆の帰省で渋滞してなかなか来ず、ようやく運ばれた救急病院では、即刻手術が行われ、父はどうにか一命は取り留めました。私も手術をしたのですが、病室のベッドの上で、「自分が余計なことをしたばかりに親に大怪我をさせてしまった」という悔恨の念に駆られ、何度も自分を責めました。ほんの１分１秒でもずれていたら、事故に遭わずに済んだかと思うと悔しくて堪りませんでした。そんな時に私を勇気づけてくれたのが「タンゴ」でした。

「人生を悩み、苦しめ、そうすればタンゴがわかる」という言葉と出会ったのです。この言葉にはどんな辛さも克服できる力があります。私自身も「どんなに逆境でもタンゴのためなら耐えられる！」と思いました。まさにこの言葉は、これ以後、私の「心の杖」となりました。

そしてもう一つ勇気づけてくれたのが「タンゴ仲間」、特に地元「八代」の皆さんでした。今まで遠くばかりに気が向いていましたが、この時、やっぱり地元が一番だということに気付かされました。当時、病室で良く聴いていた曲がカルロス・ガルデルの「ポル・ウナ・カベッサ」と「ブエノスアイレス・ミ・ケリード」でした。自分に降りかかった人生の不運とこの曲が重なって、聴くたびに涙を流しました。この事故をきっかけに、私のタンゴはそれまでの「ダンス音楽」から「人生のパートナー」となったのです。（もちろん、家族３人を、身を粉にして看病してくれた我が妻が一番のパートナーです）

さらにもっと深くタンゴを知りたいと強く考えるようになり、退院後リハビリの間も、仕事に復帰してからも毎日タンゴを聴いたものでした。父は数回に亘る再手術やリハビリのため、入退院を繰り返しましたが、どうにか生活できる位には回復しました。ただ、祖父の代から続いた「野口食堂」を閉めることになったことが残念でなりません。その後、

ダンスは１年間のブランクを経て復活しましたが、基礎からやり直しでした。特に事故以来、足が若干不自由になったこと、自分で車は持たないことにしたことで、以前のように、福岡・熊本と気軽に出掛けることもできなくなりました。最近ではもっぱら地元八代のタンゴ仲間との練習がメインで、その他タンゴコンサートやショーの「追っ掛け」に専念しています。関西・中国・九州はもちろん、東京にも出向きますが、その中で感じたのは、都会には都会の良さがあり、地方には地方の良さがあること。そして、地元八代で「タンゴ」をもっと身近に感じることができないか。ということでした。八代の皆さんにも自分の「心の支え」になってくれた「タンゴ」をもっと知ってもらいたい、もっと好きになってもらいたい。と願いました。

そこで2006年に「八代タンゴ倶楽部」を発足させる運びとなりました。

以上が「八代タンゴ倶楽部」の誕生に至るまでの出来事です。

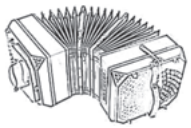
沢山の素晴らしいダンサーと出会い、音楽としての楽しみ方に目覚め、事故による挫折から「心の杖」となる言葉にも恵まれました。さらに、新たな「人生のパートナー」ができたことは、何にも代えがたい財産だと思います。

今後、皆様の人生において、思い悩むことが起きたときの一助になれば幸いです。

（八代タンゴ倶楽部）

バンドネオン購入斡旋のお願い

野口義征さんはバンドネオンを購入したいとの希望を持っておられます。ネット・オークションなどではなく、会員のどなたかから直接に或いは斡旋を頂くことで確かな品を手に入れたいというものです。
お心当たりのある方は是非野口さんにお知らせ下さい。



ファビオ・ハーゲル・セステートを聴く

佐藤　光男（横浜）

２月23日、ファビオ・ハーゲルの日本公演を横浜山下町の神奈川県民ホールで聴いた。２か月余りに及び、それも密なスケジュールの公演の６合目ほどだから、あるいはだれるかもしれないという懸念もふと浮かんだが、それもなんのその、熱のこもった演奏を堪能した。普段出無精のわたしだが、さるお方のご厚意で前列正面の席を占めることができ、久しぶりに音楽を楽しみ、声援を送った。

この人の最近の音は散発にしか聴いていない。それも漫然と聴いているから知らぬも同然なのだが。もっと強いビートの音を予想していたが、繊細な優しい音作りを心がけていることはすぐに分かった。バンドネオンは自身のみ。弦がチェロを加えて４本なのだから当然なのかもしれない。そのチェロも出すぎていないのがよかった。トータルの音の作りは正攻法で外連味がない。或いは物足りなさを感じる方もおられようが、わたしはすっと入ってくる音のほうが好きだ。終わって爽快感が残るという印象を持った。

「ア・エバリスト・カリエーゴ」、「ボエド」「ガジョ・シエゴ」などは得意なところらしい。弦の高低を生かし、それが綾をなして流れる。マエストロの強いキータッチは極力抑えられている。編曲に工夫がみられる。「ラ・マリポーサ」は全員が楽しんでやっている。ピアソラの「シータ」は角が取れている。自作の「危険地帯」では少し自分を強調している。

「黒い瞳（ロシア民謡）」、「タンゴ・セレクション」の中の「ジェラシー」はコンチネンタル･タンゴ由来だが､これは日本公演に向けてのサービスなのだろうか。しかし「タンゴ･セレクション」は､「わが懐かしのブエノスアイレス」､「淡き光に」､「ジェラシー（Celos）」の組み合わせを好んでいて自信があるのであろう。ここら辺の意図は知りたいところだ。

ファビオ・ハーゲルというと思いだすことがある。2002年、西村秀人さんに連れられた旅で一夜、ビエホ・アルマセンを覗いた。セステート・スールを率いる美男で特徴あるこの人の容貌は忘れない。狭いステージで若い人たちの生み出す音はビートの強いものだった。文字通り熱演だった。一つには、客演のフリアン・プラサがバンドネオンを弾きながら睨みをきかせていたせいかもしれない。あれはたしかバンドネオン､バイオリン各２丁、コントラバホ、ピアノの標準編成だったように思う。ともかく狭いステージで演奏者は肩をつき合わせんばかりであった。先夜のわたしのこの楽団についての予想はこの時の記憶からの連想であろう。

メンバーを見ると弦の人たちは、チェロのフリアン・アレジャーノを除き2010年録音の

CD記載のメンバーとも入れ替わっている。しかし、ピアノは常にセサル・ガルシーアの名が見られる。きっとマエストロと気の合う、また頼りにされている人に違いない。「君去りし夜」では、歌に殆どソロで伴奏をつけていたが繊細で慎重なタッチが印象に残った。

歌手のノリエガ・モンカーダは『現在最も注目されている女性タンゴ歌手のひとり』という。先に来日しているというがわたしは初めて聴いた。力強いというのではない。高音域にきれいな声を持つ。今言った「君去りし夜」では歌の雰囲気によく合う歌唱を披露していた。「チェ、バンドネオン」、「ロコへのバラード」も歌が本来持つ雰囲気に浸れる。「セ・ディセ・デ・ミ」には３人の男性ダンサーの振り付けがついた。アラバレーラな感じを補強したかったのかもしれない。声の調子はこの歌には少し不似合な感じを持った。年を経て、これからうまくなって行っても遅くはないというところではないか。

写真提供：ラティーナ

ダンスは私には分からないが、気楽に楽しめた。演技に真剣さの感じられるものはやはり見ていて好感が持てる。この時ふと感じたことがある。自身ダンスが踊れないと、踊りを見ていても恍惚感、陶酔感にはつながらないのかもしれない。ステージでの踊りは、やはりその域に達した人が味わえる楽しみなのだろう。ともあれ、一頃のアクロバティックな演出が流行らなくなったとしたら良いことだ。

今回は、文字通り『正面の砂かぶり』で楽しんだ。しかし何か違和感が残った。ステージに近すぎると音の空間に妙に歪んだ感じが出来上がる。左右ずっと離れたところにスピーカーがありそこから増幅音が聞こえる。その音は発音体本体よりもずっと大きいのだ。また、左右に展開するダンスは、静視している者には視角の領域をはるかに超える。アルゼンチン タンゴは、小人数で強いビートから繊細な音まで広く表現しようとする音楽は、大劇場よりも肩を寄せ合う小さな小屋の方が良いのかもしれない。まして踊り付きタンゴは尚更である。

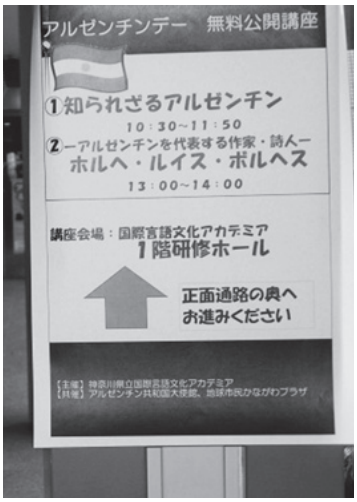
アンコールは短く「ポル・ウナ・カベーサ」と「ラ・クンパルシータ」であった。前者では弦の遊びがいかんなく発揮された。楽しい宵だった。

アルゼンチン・ディ　レポート

山根　洋（横浜）

今回のこの催しがあることは、佐藤昌叶さんが見つけてきたのでした。

会場となった「地球市民かながわプラザ」は栄区の本郷台、JRの根岸線・本郷台駅の近くにあり、佐藤（昌）さんの住まいが本郷台の次の「大船」で私は本郷台のひとつ手前の「港南台」とお互いの住まいが近く、そして佐藤さんはこの施設をよく利用していて、ほんの10日か２週間前くらい前にこの催しのことを知り、パンフレットや資料を入手したという次第です。



２月25日、神奈川県立国際言語文化アカデミアの主催で『アルゼンチン・ディ』が行われた。会場は横浜市栄区本郷台、地球市民かながわプラザ。大変申し訳ないが、この「アカデミア」の名前も初めて聴くもので、その存在さえ知らなかった。その開設１周年記念の行事ということであった。

が、「アルゼンチン・ディ」と聞いて、さらにその会場が我が家の近くにあるので、行ってみた。ということで今回、パブロ・シーグレルの素晴らしい演奏を、しかも“無料”で聴く機会に恵まれたのである。

先ず、この「アカデミア」がどんなことをやっているか、ということから説明しなければならない。『多文化共生社会の実現に寄与するため、多文化・異文化の理解の推進』を目指して各種の公開講座を行っているところである。であるから、今回のこの催しもパブロ・シーグレルだけではなく、本来の講座は：①『知られざるアルゼンチン』と　②『アルゼンチン文学を代表する作家・詩人　ホルヘ・ボルヘス』のふたつである。さらに、評判をとったアルゼンチン映画「瞳の奥の秘密」と、シーグレルの演奏があり、アトラクションとしてダンス・ショー（伴奏は平田耕治　クァルテート）と盛りだくさんで、一日を楽しく過ごさせてもらい、その上有意義な勉強をさせていただいたのである。

パブロ・シーグレルは、バンドネオン・北村聡、ギター・鬼努無月（きど・むげつ）と

のトリオで、古典（エル・チョクロ）からピアソラ、自作の数曲を素晴らしいテクニックで披露してくれた。

200席くらいの小さなホールで（舞台から客席への奥行きより横幅の方が広い）、客席は通常のホールに比べるとやや傾斜が急な勾配で、私は後ろの方の席で聴いたのだが、丁度シーグレルの手の動きが良く見えるところで、その素晴らしいキー・タッチに文字通り驚嘆・感動した。北村君のバンドネオンも、シーグレルとまさに互角に弾いていた。

パブロ・シーグレルと佐藤昌叶さん

プログラムもなく、シーグレルの英語による解説だけだったが、曲名が分かったのは１曲目の“エル・チョクロ”、ピアソラの“Fuga y misterio”、アンコールの“Libertango”だけだった。７曲、約50分・・・久々に心から楽しんだライブであった。

（追記）

３月11日、宮本政樹氏の Nochero Soy に出席しましたが、北村君も来ておられたので、その時の内容を聴きました。当日のシーグレル氏の解説と合わせて、演奏された曲は

１．El choclo
２．Milonga ＊
３．La fundición
４．Muchacha de Boedo
５．La Rayuela
６．Fuga y misterio
７．Libertango（アンコール曲）

以上の７曲でした。
２，３，４がシーグレルの自作曲
＊は会場でのシーグレルの解説でそう聞こえた。

全国会員の集いに参加して

―誠に愉快なひとときでした―

岩垂　司（札幌）

去る３月４日の「全国会員の集い」に８年ぶりに参加しました。実はこの８年の間に２回参加の準備をしたのですが、当日の悪天候で交通機関が動かず、参加が叶いませんでした。本年は開催が３月になったので、漸く年来の望みを果たすことが出来ました。多くの会員の方にとっても都合が良かったのか100名にも及ぶ参加者があり、その点からも３月開催は正解だったと思います。

会場では旧知の方々と久闊を叙し、楽しくタンゴ談義を交わすことが出来て、誠に愉快な一時でした。午前の映画も難しいことを言わなければ、娯楽作品としてはあれで良いのでしょう。演奏を披露してくれたオルケスタ･ワセダは、アマチュア楽団とは言え往年のプロの一流楽団を凌ぐほどの腕前で、昨年９月の東京リンコンで演奏してくれたバンドネオンの仁詩さんと言い、近年の若手の演奏力には目を見張るものがあります。また思わず踊り出した方々も居て、雰囲気も大いに盛り上がりました。

アカデミーも会長､幹事諸氏のご尽力により発展を遂げつつあるのはご同慶の至りです。高野さんの件も一件落着とのこと。担当幹事のご苦労に感謝申し上げます。当地の愛好会は遠方のため孤立しがちで、アカデミーは全国愛好家との重要なパイプです。この連絡路を大事にしていきたいと思います。

この度お世話になった在京幹事の皆様に深謝申し上げます。

全国会員の集いで男性用コートの取り違えがありました

受付近くのハンガーに掛けてあった中村尚文さんのコートが見つからなくなり、似たようなの（黒・ハーフコート）が残されてありました。中村さんは当日コートなしで帰宅され、現物はホテル・ラフィナートで保管中です。お心当たりの方は中村さんご本人または編集部にご連絡下さい。

蟹江丈夫さんを偲ぶ会

昨年９月８日に亡くなられた蟹江丈夫さんを偲ぶ会が行われた。快晴の３月25日（日曜）、港区愛宕の名刹青松寺に島﨑会長以下有志29名が集まり、ご親族のお二方（妹さんの大塚元子さん、お嬢さんの瀬尾恵子さん）を交えて次々に墓前に献花。

その後は場所を芝公園のメルパルクに移して昼食会となった。飯塚副会長の司会で会長挨拶の後は理事・弓田綾子さんの献辞。スペイン語の教室では習慣に従って「丈夫さん」「綾子さん」と呼び合ったこと、先生の質問に対する蟹江さんの答えはいつも巧妙にタンゴの題名が使われたこと、さらに体調を崩されてからの蟹江さんとの電話のやりとりなどが時々声を詰まらせながら静かに語られた。そのあとの親族を代表しての恵子さんの謝辞は「会員の皆様と父との間に、これほど暖かい交流があったことを改めて知ることが出来た」という内容であった。そして参加者全員がそれぞれマイクに向かい蟹江さんに纏わる想い出やエピソードを語った。

蟹江さんのお人柄からしてもこの集まりが湿っぽくなり過ぎないようにしようとの申し合わせがあったこともあり、各テーブルでは話が弾み時の経つのを忘れての約３時間を過した。そして元理事・大貫孝三さんの音頭による〆は“蟹江さん、長い間有難うございました”の言葉のあと参会者全員が一斉に起立して拍手するという、こうした会としては異例の明るく感動的なものとなった。

（報告：大澤　寛）

（写真は全て田原陽次郎さんによる）

『リンコン・デ・タンゴ』

レポート：福川 靖彦

東京 「原宿クリスティー」にて

会場を原宿クリスティーに移してちょうど２年経ちました。関係者の方々の努力と熱心なタンゴファンのおかげで、大震災のあった３月例会を除いて毎回50名を超す盛況です。主催者側も自ずと力が入って、毎回の出し物を考えるのが心地よい苦労を伴う楽しみになっています。

第61回　2011年11月15日

出席者56名

あの大震災から今日でちょうど８カ月、原宿の街もやっといつもの若者を中心とした人出が戻って、ちょっと場違いの感じがする私たちも嬉しい気分になります。

第１部

コメンテーター：福川靖彦

テーマ：「ダリエンソの歌手たち」
（演奏はすべてファン　ダリエンソ楽団）

ついに私にお鉢がまわってきました。例によってダリエンソ特集ですが、何をテーマにお話ししたらよいのかいつも性格に似合わず悩みます。大体自分の好きな40年代の演奏を中心におしゃべりすることが多いのですが、今夜は６曲ということで少しはブーイングも覚悟しながら、この楽団の専属歌手をテーマに決めました。

１．アルベルト　エチャグエ
SANTA MILONGUITA　1939年
２．エクトル　マウレ
COMPADRÓN　1942年
３．アルマンド　ラボルデ
DOS AMORES　1947年

4．アルベルト　エチャグエ
AMARROTO　1951年
5．リベルタ　ラマルケ
CANTEMOS CORAZÓN　1956年
6．マリオ　ブストス
MANDRIA　1957年

第２部

コメンテーター：水野　中

テーマ：「聴く機会の少ない楽団」

今回の水野さんは埼玉県在住、地元で以前よりご自分のタンゴの会を主催されています。ベテランのタンゴファンでありながら新しいタンゴも幅広く聴いていて、タンゴ知識の深さには敬服させられます。今日のテーマはそんな水野さんの本領発揮といったところです。

1．エル　オンセ（数字の11）　ロベルト　パンセーラ　オルケスタ
EL ONCE（O. Fresedo）　PHILIPS　1994
2．バンドネオンの嘆き　エクトル　スタンポーニ　グラン　オルケスタ
QUEJAS DE BANDONEÓN（J. D. Filiberto）　SEVEN　SEAS1973
3．酔いどれたち　オスワルド　レケーナ　オルケスタ
LOS MAREADOS（J. C. Cobián）　EPSA　EP　2009
4．チェ　ブエノス　アイレス　ラウル　ガレーロ　セステート
CHE BUENOS AIRES　MEGADISC　2003
5．ラ　クンパルシータ　カルロス　ガルシーア　タンゴ　オールスターズ
LA CUMPARSITA　VDP　1974
6．愛しい土地　アティリオ　スタンポーネ　オルケスタ
TIERRA QUERIDA　MICROFON　1990

第３部

特別出演：ロベルト杉浦（唄）
仁詩（バンドネオン）

ロベルト杉浦が帰ってきました。若い頃から歌唱力には抜群のものを持っていましたが

(故大岩祥浩さん推奨)、その後アルゼンチンをはじめ南米各地で活躍、10年の武者修行を終えて今後は日本で活動することになりました。南米での活動はいろいろ伝えられていますが、現在これだけの本場仕込みのスペイン語と歌唱力をもった歌手はタンゴ界にはいないでしょう。それだけに貴重な存在です。

伴奏は、最近めきめき売り出し中の若手バンドネオン奏者、仁詩君です。とても人柄のよい好青年で、今回もロベルトとの音合わせにわざわざ名古屋まで行ってくれました。最近は韓国にまで活躍の場を広げているそうです。

1．レメンブランサ（REMEMBRANZA）
2．マレーナ（MALENA）
3．ドゥエロ　クリオージョ（DUELO CRIOLLO）
4．ロコへのバラード（BALADA PARA UN LOCO）
5．ラ　ウルティマ　クルダ（LA ÚLTIMA CURDA）
アンコールにラ　クンパルシータ（LA CUMPARSITA）
という大サービスで、会場は大盛り上がりでした。

第62回　2012年1月24日

出席者37名

新年おめでとうございます。今年の冬は例年になく寒い日が多く、寒さには割合強かった筈の私もだいぶ応えました。今日は今年初めての「リンコン」ですが、朝から冷え込んだために出足が心配されていたところ、やはり少なめのお客様になってしまいました。

第１部

コメンテーター：吉田義之

テーマ：来日楽団による日本の歌のタンゴ

吉田さんは現在タンゴアカデミーの役員として活躍されています。和風（？）タンゴに強く、来日楽団について情報が必要なときには、真っ先に吉田さんにお聞きすることにしてます。今日はこちらからの要望に応えていただいたテーマになりました。

1．真白き富士の嶺　　**フロリンド　サッソーネ楽団**
2．宵待草　　**ロス　セニョーレス　デル　タンゴ楽団**
3．五木の子守唄　　**リカルド　サントス楽団**
4．南国土佐を後にして　　**アルフレッド　ハウゼ楽団**

5．煌めく星座　　オラシオ　サルガン楽団
6．赤坂の夜は更けて　　フルビオ　サラマンカ楽団
7．夜明けのスキャット　　キンテート　ブエノス　アイレス

第２部

コメンテーター：中村尚文

テーマ：新宿とタンゴ　第２回

第２部もこちらから是非にとお願いしたテーマです。中村さんは学生時代からのタンゴファンで、同じようなタンゴ経歴をお持ちのファンの間ではよく知られた存在です。タンゴレコード探しとタンゴ喫茶巡りは当時のタンゴファンの定番でした。古い懐かしい資料をたくさんお持ちで、今日もそのコピーをいただくのがもう一つの楽しみでもありました。

1．COQUETA　　O．T．Victor　　1928
　コケータ（O．P．Freire）　　オルケスタ　ティピカ　ビクトル
2．SUEÑO ETERNO　　O．T．Juan Maglio ‘Pacho’　　1928
　スエニョ　エテルノ（A．Bonavena）　　オルケスタ　ファン　マグリオ　パチョ
3．ALMA EN PENA　　Azusena Maisani　　1928
　アルナ　エン　ペナ（F．G．Jiménez－A．Aieta）　　アスセナ　マイサニ
4．CUALQUIER COSA　　Igunacio Corsini　　1928
　クアルキエル　コサ（H．y　J．M．Velich）　　イグナシオ　コルシーニ
5．GUAPITO　　O．T．Francisco Lomuto　　1928
　グアピート（V．Pasarello）　　フランシスコ　ロムート楽団
6．QUIERO ESTAR SOLO　　O．T．Osvaldo Fresedo　　1928
　キエロ　エスタール　ソロ　　オスバルド　フレセド楽団

第３部

バイレとコメント：GYU ＆ 夏美れい

GYU ＆ 夏美れいのカップルによるダンスショーが今日の呼び物です。このカップルはタンゴステージダンスのアジアチャンピオンです。会場がやや狭く、気の毒な面がありましたが、さすがチャンピオン、素晴らしいショーに全員魅せられてしまいました。GYU

さんは踊りだけでなく音楽にも造詣が深く、珍しい曲の解説に熱がこもっていました。

1．VIEJO PORTÓN（Vals）　Rodolfo Biagi
古き門　ロドルフォ　ビアジ
2．COMO SE HACE UN TANGO　Lucio Demare
タンゴを作るには　ルシオ　デマレ
3．BAHÍA BLANCA　Carlos Di Salri
バイア　ブランカ　カルロス　ディ　サルリ
4．VIDA MÍA　O. Fresedo y D. Gillespie
おまえ　オスバルド　フレセド&ディジー　ガレスピー
5．LA RETIRADA（Milonga）　J. C. Caseres
退却　ファン　カルロス　カセレス

第63回　2012年3月27日

３月の末になったというのに少しも春の気配すらなく、いつもならもう当然聞こえてくるはずの桜便りはいったいどこへ行ってしまったのでしょう。前回に続いてまたお客様が少ないのでは、と不安を感じながらスタートしましたが、嬉しいことに出足好調で結局元の50名を超えました。やはり多くのお客様（当然ながらタンゴファン）と一緒に楽しい時間を過ごせることは素晴らしいことです。

第１部

コメンテーター：丸岡将泰

テーマ：思い出のタンゴアルバム

丸岡さんは、小林謙一さんの主催される横浜「プーロタンゴ」の重鎮で、それだけに年季の入ったタンゴファンですが、何故かリンコンの解説は初めての登場です。今日のプログラムを拝見すると、その年季の入り具合がはっきり判ります。懐かしいラジオ放送「これがタンゴだ」の冒頭に､「エル　ジョロン」に乗って流れたホルヘ･カルダーラのレシタードをプログラムに付けてくださったのも嬉しいかぎりです。

1．EL LLORÓN　Francisco Canaro Orq. Típ.　c：A. Alenas
泣き虫
2．CORAZÓN DE ORO　Francisco Canaro Orq. Típ.
黄金の心

3．CUESTA ABAJO　　Rubén Guerra/Roberto Pansera
下り坂
4．CARILLÓN DE LA MERCED　　Lita Morales/Vieri Fedanzini
メルセの鐘
付録：　――収録された本物のメルセ寺院の鐘の音――
5．SOMOS（bolero）　　Jorge Arduh Orq. Típ.　　c：Marcelo Santos
我々は
6．MILONGA DEL TROVADOR　　Roberto Goyeneche
吟遊詩人のミロンガ

第２部

コメンテーター：脇田冨水彦

テーマ：こてんこてんの古典

脇田さんはタンゴアカデミーの役員ですが、会員に通知する葉書の作成と配送を一手に引き受けて、役員の中で最も多忙な方です。一方では、ご自身の楽団「小岩スール」のバンドネオン弾きという顔をお持ちです。リンコンの解説は､初めてに近いかもしれません。とてもシャイな方ですが、お話はめっぽう面白くて、再度、再再度とお願いするようになるでしょう。

1．EL LLORÓN
2．LA TRAMPERA　　Trio Pantango（gt/bn/cl）
3．EL ESQUINAZO
4．CANARO　　Los Muchachos De Antes（gt/cl）
5．DERECHO VIEJO
6．JOAQUINA　　Tuba Tango（gt/bn/cl/tb）
7．LA REFALOSA
8．LA CUMPARSITA　　Los Guapos Del 900（gt/bn/fl/tb）
9．LA CARA DE LA LUNA
10．EL CHOCLO　　4to VIEJO Bs As（gt/bn/fl/vl）

第３部

歌とトークショー：ユリ　アスセナ

ユリさんの歌はリンコンでも初めてです。アラバレロな唄い方と、会場を歩きまわってお客さんたちと会話しながらのトークは絶品、会場は大盛り上がりです。ご本人もリンコンの会場のような場所で歌うのが大好きとのことで、ファンとの交流をとても大事にしているのが伝わってきます。これからもどしどし唄っていってもらいたい歌手の一人です。

1．LOCA
2．EL CHOCLO
3．FUMANDO ESPERO
4．ADIÓS NONINO
アンコール：CHE BANDONEÓN

飛び入り特別ゲスト：平田耕治　バンドネオン
徳武正和　ギター

なんと若手バンドネオンの実力者、平田耕治君が顔を出してくれました。友人のギター奏者徳武正和さんとライブの途中だったそうです。早速いつものように演奏をお願いしたところ喜んで弾いてくれました。時期はずれのボーナスを貰ったようで、とても得をしたような気分になりました。

演奏曲：ロ　ケ　ベンドラ、ミロンギータ

新・訳詩コーナー

大澤　寛

Cucusita（男の子の名前）

（L）Carlos Lucero　（M）Alberto Castillo

ごめんなさい　お医者さん
教えて貰いに来たんです　本当かどうか
３日寝ないで考えました　嘘じゃないです　誓います
あんないいことが本当にあるの
ピノチョが病気で死にそうで　救急で病院に運ばれて
そしたら不思議な妖精が来て　魔法で治しちゃったそうです

お医者さん　あなたは僕を知らないね
僕の名前はククシータ　妹が一人いるんです
妹は起きて遊べないんです
可愛いお下げの金髪で
どんなに綺麗か　見て欲しいなあ
それなのに　もう半年も歩けないんです
ですからお願いするんです　とても偉いお医者さん
その妖精を今すぐ呼んで　僕の家に行かせて下さい
そしてピノチョを治したように　僕の妹を治してくれと
頼んで下さい　そしたら妹も遊べるんだと

医者は驚きその子を見つめ
腕に抱きしめ涙を浮かべ
“すぐに治るさ妹は　お前が神さま信じたら”
喜び勇んで駆けもどり
その夜はぐっすり母の腕
夢には妖精が現れて
妹はすぐに歩き出した

原詩はLetra-Dに出ています。CDはEMI DBN 7243-5-29430-2-9およびEMI 7664922（いずれもMiguel Montero の唄。今回も杉山滋一さんのご教示による）Todotango にも収録されています。

日本タンゴ・アカデミーの行事予定

関西リンコン・デ・タンゴ　日時：5月20日（日）　12：00
場所：神戸三宮「サロン・ど・あいり」

東京リンコン・デ・タンゴ　日時：5月22日（火）　18：30
会場：TEA&CAFÉ「原宿クリスティ」

第77回タンゴ・セミナー　日時：6月10日（日）　13：30
会場：東医健保会館（JR信濃町駅下車５分）

（ご注意）今号をお届けした封筒には新しい会員証が入っています。ご確認下さい。

編集後記

３月４日の「日本タンゴアカデミー全国会員の集い」には昨年を上回る98名の方々の参加がありました。詳細はTangueando en Japónの次号に掲載されます。お知らせは来年度は会場が変更になることです。新会場は東京メルパルク（港区・芝）の予定です。今号から新企画として「私の愛聴盤」が始まり、「忘れ得ぬタンゴの人々」は今回が最終回となりました。いろいろな企画に皆様からのアイディアをお寄せ下さい。次号の締め切りはTangueando en Japón が５月末、Tangolandia が９月末です。皆様どんどんご出稿下さい。これまでにお書き頂いてない方々もぜひご投稿下さるようお願いいたします。（大澤）

日本タンゴ・アカデミー副機関誌

「Tangolandia」（非売品）　第24号　2012年4月 発行

発　　行：日本タンゴ・アカデミー
〒156-0044　東京都世田谷区赤堤２－32－14－104（飯塚方）
電話＆FAX 03-3324-1989　E-mail　iizuka@kve.biglobe.ne.jp
編　集　部：大澤　寛（編集長）〒162-0051
東京都新宿区西早稲田２－１－23－609
TEL＆FAX 03-3208-2247
E-mail　hdomingo@bc4.so-net.ne.jp
島﨑　長次郎・齋藤　冨士郎・弓田　綾子・西川　薫
表紙デザイン：脇田　冨水彦